

地球音楽の喜びをあなたへ

The Joy of Global Music

—未来の地球市民となる子どもたちのための多文化音楽教育—

降矢 美彌子 著



多文化音楽学習 DVD 教材添付

現代図書

地球音楽の喜びをあなたへ

The Joy of Global Music

— 未来の地球市民となる子どもたちのための多文化音楽教育 —
— Creating Citizens of the Earth through Multicultural Music Education —

降矢 美彌子 著

多文化音楽学習 DVD 教材添付
Multicultural Music Education DVD included

現代図書

凡例

1. 表記について

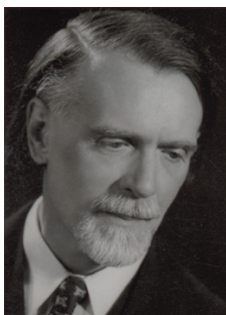
- 1) 見出し・本文とも原則として現代仮名づかい、常用漢字を用いる。ただし、固有名詞、用語、引用文などはこの限りではない。
- 2) 外国語は、なるべく原語に近い発音のカタカナで表記し、2単語以上で成り立つ用語は、単語ごとにナカグロ「・」を入れ、必要がある場合は、() 内に原語を記す。なお、原語の発音と違っていても、日本での読み方が一般化している場合は、そちらを用いる。
- 3) 外国語の氏名は、カタカナで表記し、姓名の間にナカグロ「・」を挿入した。また() 内に現地で用いられる字綴りを表記した。なお、初出の際、姓名を表記し、以降は、姓のみを表記する。
- 4) 研究者、演奏者等の氏名には、敬称をつけない。
- 5) 引用・参考文献については、著者名、出版年、論文名、著書名、出版地、出版社、ページ数の順で表記した。暦年は、西暦で統一した。
- 6) 欧米の著書名、雑誌、CD、CD-ROM、DVDのタイトルは、イタリアック表記とする。
- 7) ハンガリーでは、名前を姓名の順で表記するので、本著でもハンガリー人については姓名の順で表記する。

2. 記号について

- 「 」 論文名、引用文、引用句、項目名、曲名、演目名、授業提案の創作名、修士論文題目の引用句など。
- 『 』 日本語の著書名、雑誌名、曲集名、引用文の引用句、CD、LP、CD-ROM、DVD、LD、ビデオのタイトルなど。
- () 引用・参考文献および主な引用のページ数、外国語および外国人の名の原語表記。多文化音楽学習 DVD の解説文の現地の読み方にあたる漢字、曲名の説明、バリ語の発音等。
- [] 多文化音楽学習 DVD の解説文の名前や地名の読み仮名。

3. 写真について

写真提供者名は「授業提案のための資料・音源」に記した。名前のないものは、私の撮影である。



コダーイ・ゾルターン

謝辞

国際コダーイ協会の1986年度の奨学金により、ハンガリーで勉強する機会を得ました。ハンガリーの音楽教育は、学問、芸術、教育が有機的に関連する人間教育です。ハンガリーでの学びは、その後の私の歩みの原点となりました。ここに感謝を捧げます。

はじめに

— 私たちを取りまく状況と多文化音楽教育 —

地球環境や子どもをめぐる状況は、音楽教育とは一見関係ないように見受けられますが、音楽教育を考える基盤として重要な要素です。

今日、地球は様々な難題を抱えています。CO₂ 排出量の増加、自然災害、癌や HIV（ヒト免疫不全ウイルス）、SARS（重症急性呼吸器症候群）などの各種疾病、人口爆発と食糧危機や資源エネルギーの枯渇など、生命をおびやかす環境問題は深刻です。さらには 20 世紀後半から続く戦争やテロ、核の脅威が、世界を憎悪と恐怖に陥れています。

この状況の中で、人々は政治的・経済的な理由で否応なく国の枠組みを越えて流動し、世界の国々では多民族化に拍車がかかっています。日本も例外ではありません。世界的な勢いでグローバル化が進むなか、多民族国家では異民族間で摩擦が生じています。異文化の受容、とりわけ社会の少数派の人々、マイノリティの文化受容は、多民族国家の急務となっています。

さて、本著のテーマである多文化音楽教育は、多民族国家アメリカで、1960 年代の公民権運動をきっかけに生まれた多文化教育から発展しました。多文化教育は一言で言えば、マイノリティの文化理解を通して多民族共生を実現するための教育です。従って、多文化音楽教育も同じ理念を踏まえた音楽教育ということができます。

今日の国際社会は、コンピューターなど情報機器の驚異的な発展による IT 社会です。音楽情報は複製メディアによって簡単に入手でき、人々は、グローバル化した音楽文化を享受しています。音楽界全体をみわたすと、20 世紀後半以来の多様な音楽状況を引継ぎ、古今東西のあらゆる時代、地域、様式の音楽が存在します（船山 1982：1714）。人々は、多岐にわたる地球音楽¹⁾に囲まれています。一人ひとりの選択肢をみると、

1) 水野信男（2007）から引用し、地球上のあらゆる地域、あらゆる民族によって奏でられ、聞かれている音楽文化を表す用語として概念規定した。「用語の解説」p.84 参照のこと。

むしろ単一化の傾向が否めません。

一方、日本の子どもをめぐる状況は、世界的な状況と歩調をあわせるかのように悪化の一途をたどり²⁾、私たちは日々胸を痛めています。

音楽教育は、以上述べた地球環境や音楽情報の変化と日本の子どもをめぐる厳しい状況とに、どのように応えて行けばよいのでしょうか。私は、音楽教育はこれらの課題に応えるものでありたいと思います。

音楽的な側面としては、マジョリティの文化が地球を覆い尽くすのではなく、マイノリティの文化の独自性が保たれる必要があると思います。その結果世界の音楽文化の多様性が保たれることが音楽教育の重要な課題だと考えます。多様性の保持こそが、今日の地球市民である人類が求める本当の豊かさの根源でしょう。音楽のグローバル化が進み、音楽の選択肢がかえって狭まる現在、多様な地球音楽に気づくことのない子どもや若者にも、この豊かさを知って欲しいと願います。地球音楽の豊かさに触れた上で、個人の好みを大切にしたいのです。

この願いにもとづき、子どもや若者のために多文化音楽教育が必要だと思えます。多文化音楽教育では、音楽だけでなく、社会的・文化的な背景や暮らしなどを学ぶことを大切にす姿勢が必要です。その根底には、個々の音楽文化を継承発展させて来た人々を敬い、それぞれの文化の音楽観や伝承法を尊重することが求められます。何よりも、人々の生活における音楽文化の意味や、各音楽文化の担い手の心情を理解し共感することが大切です。このような姿勢をもって音楽文化を学ぶことによって、子どもや若者の心に、古くからの暮らしに立脚した人間性が蘇るかもしれません。ひいては、豊かさを育んだ地球環境そのものに思いを馳せるようになるのではないのでしょうか。

多文化音楽教育では、表現教育に重点をおく従来の音楽教育の指導法とは異なります。表現と鑑賞活動を通して音楽構造や社会的・文化的背景を理解させ、創作活動も有機的に関連させた指導が必要です。本著で

2) 不登校や学級・授業崩壊、教師や児童の暴力行為、いじめや自殺、精神障害、家庭内暴力、犯罪行為の増加、親による虐待、モンスター・ペアレンツ、教師の不祥事などの問題。2007年度1年間で学校を30日以上欠席した小中学生不登校児童・生徒数129,254人（文部科学省の学校基本調査速報2008.8.7）。

は、日本の多文化音楽教育の新たな観点をもつ指導法を、添付した多文化音楽学習 DVD 教材³⁾(以下、タイトルを除いて DVD 教材と略記します)を活用した授業設計⁴⁾を示して、具体的に提案したいと思います。

この指導法の第一のポイントは、自文化のアイデンティティを育む視点です。従来、日本の音楽教育では、教科内容が西洋音楽に偏ってきたために⁵⁾、自文化のアイデンティティを育む視点が欠けていました。自文化のアイデンティティを認識せずに、どうして他の文化が理解できるでしょう。また、自分を認められない子どもたちが増えている今日、アイデンティティの確立に関わって、学習者⁶⁾にセルフ・エスティーム⁷⁾(安藤 2007:8-15)を促すことにも配慮せねばなりません。心理学や教育学が提起するとおり、自己の尊厳を認められなければ、自身のアイデンティティも確立できないからです。

第二のポイントは、異文化受容に関わって、音楽を社会的・文化的な脈絡の中で捉え、機器による第二次口頭性⁸⁾も含めて伝承者からの学びを重視する視点です。

第三のポイントは、DVD 教材を使った授業であっても、五感を活用した直接体験を重視する視点です。インターネットや携帯電話といったバーチャルな世界に生きることの多くなった今日の子どもや若者⁹⁾には、直

3) 2000 年～2003 年、科学研究費補助金基盤研究 (C) (1)『国際化時代の教員養成における多文化音楽教育の CD-ROM 教材開発』(研究課題番号 12680241)で開発制作したものを、本著のために内容を改訂し 1 枚の DVD に収録した。

4) 学習要求と目的を分析し、その要求に適合する伝達システムを開発する全過程を表す。

5) 音楽取調掛の伊澤修二は、日本の音楽教育について 3 つの意見からなる上申書を提出し、日本の音楽教育は、和洋折衷の理念で行われることとなったが、異文化の和洋折衷の理念は、実現不可能で、結果的に西洋音楽的な内容と理念で行われてきた(山住 1967)。特に、専門教育において、その傾向が強かった。戦後の音楽科教育では、特に昭和 33・34 年度の学習指導要領では、日本の伝統音楽の内容が抜本的に強化され、その後、平成 10 年度の改訂で中学校では和楽器の学習が必修扱いになるなど、自国の音楽文化への視点が強化されたが(文部省 1958,1998)、現状では、音楽文化のアイデンティティを育むところまでには至っていない。

6) 児童・生徒・学生のすべての学習対象者を表す用語として用いる。

7) self-esteem 自己尊重、自己尊厳と訳される。

8) 「用語の解説」p. 83 参照のこと。

9) 加藤千洋「携帯を置き街によう」『高校生喜多方サミット新聞』(朝日新聞 2008.7.5) 加藤は、喜多方高等学校で、詩人寺山修司の著書『書を捨てよ町に出よう』を引用して、「携帯、パソコンを置いて街に出よう」、「五感を総動員して知らなかったことを吸収しよう」と高校生に語った。バーチャル (virtual) とは、「実態を伴わない」の意。

接的な体験を切り口として理解や共感を育むことが必要です。五感を研ぎ澄ます体験は、音楽教育のみならず、地球の未来を担う子どもたちに切実に求められていると思います。

本書は1) 多文化音楽教育の理念と指導法の概念規定、2) 新たな観点をもつ多文化音楽教育の指導法に関する具体的な提言、3) DVD教材を用いた5つの授業設計と、7つの授業提案を骨子として構成しました。

DVD教材では、市販教材でほとんど扱われない日本とアジアの民俗音楽を取り上げました。それらを用いて具体的な指導法について述べます。多文化音楽教育は、地球上のすべての音楽を対象としています。したがって、本書で提起する理念や指導法は地球音楽の全てに共通するものであると考えます。授業提案では、宗教的な音楽やポップス、現代邦楽¹⁰⁾、21世紀の現代音楽にも扉を開くことに努めました。

急速な格差社会化の中で、子どもや若者のみならず、社会的な弱者が苦しんでいます。日本の多文化音楽教育が、学習者のセルフ・エスティームやアイデンティティの確立を促し、異文化全般の受容能力を高める起爆剤となることを願います。そして、多文化音楽教育によって、地球上にともに生きる他者への眼差しや社会的な弱者への眼差しを育み、地球家族との共生の心を育むことを願うのです。私は、未来の地球市民となる子どもたちのために、音楽教育がこのような役割を担うことに貢献したいと思います。

10) 邦楽という用語は、西洋音楽と対比した用語であるが、便宜上用いた。

目次

はじめに — 私たちを取りまく状況と多文化音楽教育 —	i
第1章 アメリカの多文化音楽教育	1
1-1 多文化教育と多文化音楽教育	1
1-2 アメリカの多文化音楽教育の先駆者	3
1-3 メアリー・ゲッツの仕事	5
第2章 日本の多文化音楽教育	9
2-1 日本の状況にもとづく多文化音楽教育の理念	9
2-2 日本における多文化音楽教育の理念と指導法の定義	11
第3章 新たな観点をもつ多文化音楽教育の指導法	15
3-1 視聴覚教材について	15
3-2 指導法について	16
3-3 教師の取り組みについて	19
3-4 授業設計について	21
第4章 新たな観点をもつ多文化音楽教育の授業設計	25
4-1 多文化音楽学習DVD教材について	25
4-2 多文化音楽学習DVD教材を用いた授業設計	30
4-2-1 アイヌ民族の音楽文化による授業設計	31
4-2-2 椎葉の音楽文化による授業設計	34
4-2-3 竹富島の音楽文化による授業設計	38
4-2-4 バリ島の音楽文化による授業設計	42
4-2-5 五箇山の音楽文化による授業設計	47
第5章 多文化音楽教育の授業提案	51
5-1 わらべうたから地域の民俗芸能へ	52
5-2 地域の音楽の学習から始める文化の総合学習	56
5-3 祈りのひびき — 声明からグレゴリオ聖歌、クラーンまで —	58

5-4	ア・カベラ合唱の響きへの誘い —純正調の響き—	61
5-5	魂の叫び —ハモネブからゴスペル・ソングへ—	65
5-6	日本の音楽伝統から新しい日本の唄へ —新内節の岡本文弥と、邦楽におけるクロスオーバーの先駆者、 平井澄子の世界—	68
5-7	現代音楽への誘い —ハンガリーの作曲家クルターグ・ジェルジュの音と沈黙の世界—	72
第6章 おわりに		77
引用・参考文献		79
附録1. 用語の解説		83
附録2. 授業提案のための資料・音源		85
附録3. 添付の多文化音楽学習 DVD 教材について		90
附録4. 多文化音楽学習 DVD 教材の内容サイト・マップ		92
日本語サイト・マップ		
	アイヌ民族の音楽文化学習	92
	椎葉の音楽文化学習	93
	竹富島の音楽文化学習	94
	バリ島の音楽文化学習	95
English site map		
	An Introduction to Music and Culture of the Ainu People	96
	An Introduction to Music and Culture of the Shiiba People	97
	An Introduction to Music and Culture of the Taketomijima People	98
	An Introduction to Music and Culture of the Bali People	99
あとがき		101
索引		103

第 1 章

アメリカの多文化音楽教育

1-1 多文化教育と多文化音楽教育

多文化教育は、多民族国家アメリカで、1960年代の公民権運動をきっかけにして発展しました。多文化教育では、ジェームズ・A. バンクス (James A. Banks) とカール・A. グラント (Carl A. Grant) の研究が重要です。バンクスは、多文化教育について、「カリキュラムや教育機関を改革することにより、男女両性および多様な社会階級、人種、エスニック集団の学習者が、平等の教育機会を経験できるようにすることを主要な目標とする教育改革運動」(バンクス 1999: 198) と定義しました。グラントは「自由、正義、平等、公正、そして合衆国憲法と独立宣言書に記された人間の尊厳に関連する哲学に基づいた概念」(Grant 1997: 171-172) と定義しました。

バンクスは、「多文化教育の第一目標 (もっとも幅広い意味で) は、『自由への教育』である」としました。そして、その意味を「第一に、学習者達が民主的で自由な社会に参加する知識、態度、スキルを育み、第二に、他の文化や集団に参加するために、エスニックや文化の境界線を越えることのできる自由、能力、スキルを拡大することである」と説明しています (バンクス 1999: 157)。バンクスの多文化教育のキーワードは、1) 多様性 (多様な声、多様な視座)、2) 教師を変える、教師が変わる、3) 違いを活力に (バンクス 1999: 159-175) の3点です。これらのキーワードは、多文化教育を具現していると言えましょう。日本では、小林哲也と江淵一公が多文化教育の比較研究を行い、「多文化教育は、異なった民族あるいは文化の間の一国内での共存・共生をめざす教育の一形態」と定義しました (小林; 江淵 1993: ii - iii)。

それまでの音楽教育では、文化理解の視点は明確ではありませんでした

た。しかし、1984年アメリカのウエスリアン大学で開かれたウエスリアン・シンポジウム (The Wesleyan Symposium¹⁾) (McAllester 1985) で、12名の民族音楽学者²⁾ が、音楽理解は音楽と人々の暮らしとの関連性から深めることができると提言したことで転期がおとずれます。シンポジウム以降、全米音楽教育者会議 (Music Educators National Conference) の多文化音楽教育の資料集などに、ダンス、美術、言語、人々の暮らしの情報など、音楽の周辺にある様々な領域を取り入れた指導事例が紹介されるようになりました (磯田 2003: 68)。彼らの提言は、音楽教育と民族音楽学の協同という視点からみて、今日なお意義深いものといえます。

以下に、このシンポジウムの参加者の中から、ジョン・ブラッキング (John Blacking)、バーバラ・シュミット＝レンガー (Barbara Schmidt-Wrenger)、ブルーノ・ネトル (Bruno Nettl) の3人の音楽学者の提言を紹介しましょう。

ブラッキングは、音楽の理解に最も良い方法は、音楽を聴き続け、パフォーマンスし続けることだとして、南アフリカのヴェンダ (Venda) 族の教育システムを通して、以下の2点を提言しました (Blacking 1985: 43-52)。

- (1) 民族音楽の音楽と舞踊、パフォーマンスを通して社会や文化を理解すること。
- (2) 民族音楽の学習を通して社会や文化を理解するためには、授業実践の中に、個々の民族が音楽を伝達するのと同じ過程やパフォーマンスを取り入れる必要があること。

シュミット＝レンガーは、中央アフリカのチョクウェ (Tshokwe) 族が、

1) ウエスリアン大学 (Wesleyan University)、全米音楽教育者会議 (MENCと略称される) の学際委員会 (Interdisciplinary Committee) などの支援により、ウエスリアン大学で開催された (1984. 8. 6-16)。全米音楽教育者会議は1907年に設立された。1998年に全米音楽教育者会議 (Music Educators National Conference) から全米音楽教育者協会 (The National Association for Music Educators) に名称を変更、アメリカ最大の音楽教育研究組織。

2) 12人の民族音楽学者は以下の通りである。David P. McAllester, Joann W. Keali' inohomoku, Robert Garfias, Adrienne L. Kaeppler, John Blacking, Gerald T. Johnson, Bruno Nettl, Barbara Schmidt-Wrenger, Charles Keil, Carol E. Robertson, Timothy Rice, Edward O' Connor.

輪になって踊ったり歌ったりするパフォーマンスの中で無意識に音楽を学ぶと同時に、より人間的な態度をもって人間生活を創造することも学べると報告しています (Schmidt-Wrenger 1985 : 77-86)。

ネットルは、アメリカのモンタナ州とイランという2つの対照的な文化をとりあげ、その音楽における学習と指導について考察した結果、いくつかの社会では、音楽は文化を教える手段とみなし、音楽が実際にそのような機能をもつと述べています (Nettl 1985 : 69)。

1-2 アメリカの多文化音楽教育の先駆者

アメリカの民族音楽学者で音楽教育家のテレス・M. ヴォルク (Terese M. Volk)、デイヴィッド・J. エリオット (David J. Elliott)、パトリシア・S. キャンベル (Patricia Shehan Campbell) は、アメリカの多文化音楽教育の研究にとって重要です。

ヴォルクは、音楽の解釈は、音楽それ自体の要素によるものとし、多文化音楽の学習は、学習者の音楽の世界の基礎を広げ、彼らが新しい音楽の世界に向かうとき、より開放され寛容になることを可能にすると述べています。彼は、多文化音楽教育の理念によって、どんな音楽を扱う場合にも、音楽教育の本質的な活動、つまり聴き、表現し、創るという課題が存在すると指摘しました (Volk 1998 : 6)。

ヴォルクは著書の中で、多文化音楽教育の理念のガイドとして、エリオットの多文化音楽教育のカリキュラム・モデル (Multicultural music education: curriculum models) (Volk 1998:14) を示しています。エリオットの多文化音楽教育のカリキュラム・モデルのフローチャートには、バロックから現代音楽に至る西洋音楽から、電子音楽、コンピューター音楽、ポピュラー音楽、諸民族の音楽など幅広い多様な音楽が扱われています。彼は、また、パフォーマンスを中心とするカリキュラムについて論じています (Elliott 1989 : 11-18)。

キャンベルは、アメリカの多文化音楽教育の研究者・実践家³⁾として、

3) 2002年度のMENCシニア・リサーチャー賞 (Senior Researcher Award) を受賞。

多くの多文化音楽教育の著書⁴⁾を著し、国際会議などで数多くの講演を行って、世界の音楽教育に影響を与えています。キャンベルの業績は、フィールド・ワークによって得た伝承者の演奏と背景などについての知見を幼児教育から教員養成に至る音楽教育に反映させた点にあります。日本にも何度も来日して影響を与えています。キャンベルの多文化音楽教育について、少し詳しく述べます。

キャンベルは、磯田三津子の研究によると（磯田 2003）、多文化音楽教育の目的を、民族の多様性の尊重と文化の相互理解の2つの概念に分けて考えています。具体的には、ワールド・ミュージック教育（World music education）とマルチ・エスニック音楽教育（Multiethnic music education）です。ワールド・ミュージック教育の目的は、音楽分析、演奏の能力の育成、地域や時代ごとの音楽の特徴を理解することにあります。キャンベルの多文化音楽教育は、音楽を取り巻く国家の歴史や人々の暮らしを理解することを目的として文化理解のための視点が加えられています。

キャンベルは、グローバル・ミュージック・シリーズ（*Global Music Series*）全17冊⁵⁾の『グローバルに音楽を教えよう（*Teaching music globally*）』（Campbell 2004）の中で、「口承と聴覚テクニク（*Oral/Aural techniques*）（Campbell 2004: 10）」と題して、口承と記譜について、口承によるものであれ、記譜によるものであれ、音楽教育の中では、聴覚手段が歌や楽器による音楽の核心の発見の中心に位置するものだと述べています。そして、記譜は、聴くことの体験を効果的

4) 多文化音楽学習のためのシリーズは、以下の内容である。伝承者による録音が収録されている。

Patricia Shehan Campbell Collection: From Bangkok & Beyond (Thai Children's Songs, Games and Customs), From Rice Paddies and Temple Yards (Traditional Music of Vietnam.), The Lion's Roar (Chinese Luoguo Ensembles), Roots & Branches (A Legacy of Multicultural Music for Children), Silent Temples, Songful Hearts (Traditional Music of Cambodia), Traditional Songs of Singing Cultures (A World Sampler).

5) *Global Music Series (Music in East Africa, Music in Central Java, Teaching Music Globally, Carnival Music in Trinidad, Music in Bali, Music in Ireland, Music in the Middle East, Music in Brazil, Music in America, Music in Bulgaria, Music in North India, Mariachi Music in America, Music in West Africa, Music in South India, Music in Japan, Thinking Musically, Music in China).*

に高め、図柄による地図として音楽のメロディーやリズムの構成要素の理解を助けるものだとしています。キャンベルは前掲書（Campbell 2004）で、教材である非西洋音楽を五線譜に表しています。

一方、同シリーズの『音楽的に考えよう (*Thinking musically*)』（Wade 2004）の著者ボニー・C. ウェイド（Bonnie C. Wade）は、CDを添付し、教材を五線譜には表していません。以上のことから、アメリカの多文化音楽教育における口承による音楽の五線譜使用についての考え方は、必ずしも統一的ではないと言えましょう。

本来は口頭伝承による音楽も研究のために採譜して五線譜に書き表されますが、私は、口頭伝承による音楽のそのような楽譜を教育の目的では使用してはならないと考えます。音楽は、それぞれ固有の語法を持っていて、形が一見似ているように見えても、それぞれの音楽は、構造、要素、内容、考え方、意味など異なっているからです。1-3で先行研究として分析の対象とするメアリー・ゲッツ（Mary Goetze）⁶⁾も、口頭伝承による多文化音楽の指導に五線譜化した楽譜を用いず、伝承者からの直接的な学びや伝統的な音楽観、伝承法を重視する立場をとっています。

1-3 メアリー・ゲッツの仕事

メアリー・ゲッツは、長年、アメリカの児童合唱の指導的な役割を担い、数多くの合唱曲を編曲しています。その後、インディアナ大学の教授として多文化合唱団インターナショナル・ヴォーカル・アンサンブル（International Vocal Ensemble 以下 IVE と略記します）を設立⁷⁾し、留学生の多い大学の利点を生かして、諸民族の多文化合唱を留学生か

6) 元インディアナ大学教授。多文化音楽教育の先進的な研究者で、ジェイ・ファーンとともにデジタル教材 *Global Voices in Song* の制作を行った。

7) ゲッツによって1995年に設立されたインディアナ大学の学生をメンバーとする混声合唱団。非西洋音楽をレパートリーとする。CD *One World, Many Voices One Choir*、*Many Songs Volume I・II* をリリース。*Volume I*には、私との共同研究の成果として福島県いわき地方の「じゃんがら念仏踊り」が、*Volume II*には、アイヌ民族の「バツタキ・リムセ」、「ウタリオブンパレワ」、富山県五箇山民謡「こきりこ」が収録されている。

ら直接学ぶという方法で実現しました。IVE の最初の CD には、21 民族の合唱が収められています⁸⁾。

ゲッツとジェイ・ファーン (Jay Fern)⁹⁾ は、1999 年にインディアナ大学の補助金を得て、口頭伝承で伝えられた合唱を、伝承者から直接に学ぶという理念に基づいて、CD-ROM 教材を開発しました。コンピューターとプロジェクターを活用するこの CD-ROM は、音楽教育における世界最初のデジタル教材で、*Global Voices in Song* シリーズ (以下 GVIS と略記します) として出版されました。2002 年にさらに利便性に優れた DVD のシリーズとして改訂リリースされました¹⁰⁾。GVIS には、伝承者の演奏モデルと演奏に必要な情報、そして背景である文化の情報が収録されています。学習者は五線譜に置き換えることなく、第二次口頭性によって、伝承者のモデルを見ながら学びます。デジタル教材であるため、必要な情報を必要な時、瞬時に相互に関連させながら学習者に繰り返し提供することができるという利点があります (Goetze ; Fern 1999)。

ゲッツと私は、1996 年から約 8 年間多文化音楽教育の指導法と教材開発の共同研究を行いました¹¹⁾。本著に添付した DVD 教材は、この共同

8) CD Volume 1: Latin America; United States; Jamaica; Indonesia; Aotearoa; New Zealand; Japan; Latvia; South Africa; Ghana; Zimbabwe. CD Volume 2: China; Japan; Brazil; Venezuela; Azerbaijan; India; Yiddish Songs; Yugoslavia; Karelia; Zaire; South Africa; Zimbabwe.

9) ゲッツとともに *Global Voices in Song* 制作を行った。制作当時、インディアナ大学/パーデュー大学インディアナポリス校 IUPUI (Indiana University-Purdue University Indianapolis) 助教授。

10) GVIS は、当初、映像が小さくその精度も低いという限界をもっていたが、2005 年、24 曲を収めた 6 巻からなる利便性に優れた Global Voices DVD シリーズとして、改訂リリースされた。*Global Voices Series, Grade 1-6, Grade 6* に五箇山民謡「こきりこ」が収録されている。*Kokiriko: Traditional Dance and Song from Gokayama, Japan.*

11) 国際音楽教育協会 (International Society for Music Education) 第 22 回大会 (1996.

7) の際、アムステルダムにおいて、ゲッツは私の主宰する福島コダライ合唱団の「じゃんがら念仏踊り」のワークショップに強い印象を受け、帰国後、その時のビデオ記録をもとに IVE の演奏会で演奏した。「こきりこ」は 2005 年に改訂された GVIS 第 6 巻に収録。*Kokiriko: Traditional Dance and Song from Gokayama, Japan.* 2004 年には IVE の主催で、福島コダライ合唱団の演奏会をインディアナ大学で行い、福島コダライ合唱団と IVE は、互いのレパートリーを事前にデジタル教材で学習し、コンサート前日にゲッツと私の指導によって合同練習し、数曲をジョイントで歌った。福島コダライ合唱団は、1987 年創立、多文化合唱 (グレゴリオ聖歌から西洋現代曲、日本民謡、民俗芸能、アジアの民俗芸能など) をレパートリーとする教員合唱団。8 回の海外公演、7 枚の CD をリリース。

研究を踏まえて、ゲッツのGVISの制作意図を踏襲し、さらに内容を深化させたものです。参考までに、ゲッツのGVIS制作意図を解説書から書き出します。

- (1) 口頭伝承で伝えられる西洋芸術音楽以外の音楽の学習に必要なとされる資料を提供し、音楽の再創造を助ける。
- (2) 音楽を学習する際、音楽家が歌を創造させ、継承してきた精神を感じることができるために、それらの歌を人々がいつでもどのように歌うのかを理解できるように制作した。
- (3) 学習者が歌唱のスタイルや音色、発音、言葉の意味を理解し歌うことができるように、音楽の様式および文化に関する情報を、映像、音響、文章で収録した。
- (4) 可能な範囲で、その地域の文化の中で伝承され、継承されてきた方法で歌を学習するために、伝承者や研究者による、文化、歴史、地理学、歌が上演される状況に関する情報を提供した。
- (5) 音楽の学習は、常に見たり聴いたりできる音響か映像、生きたモデルを伴って行われる必要があるという理念に基づいた。
- (6) 芸術家、伝承者、演奏提供者と一緒に学べない場合に、使用されることを意図した。

これまでは、異文化学習では伝承者を招聘できない場合、異文化と学習者の間に楽譜と教師が入り、学習者は五線譜を用いて、伝承者ではない教師をモデルとして学習していました。ゲッツの教材の特徴は、スクリーン上の映像であっても、五線譜を用いずに、伝承者と対話しながら学ぶような疑似体験によって学習することができるという点にあります。この点でこれまで行われがちであった3つの異文化学習の問題点、1) 西洋音楽ではない音楽を西洋音楽の手法で学習する、2) 伝承者の演奏を見ることなく学習する、3) 音楽と文化背景を関連させること無く学習するという問題点を解決するものと言えましょう。

第 2 章

日本の多文化音楽教育

2-1 日本の状況にもとづく多文化音楽教育の理念

日本は、多様な民族が構成するアメリカのような多民族国家ではなく、単一民族国家であるという認識が一般的です。しかしあらためて日本の成り立ちを考えると、アメリカとは別の意味で文化的な多層性を帯びており、多文化音楽教育の必要性が内在すると考えられます。次にその具体的な状況をあげてみましょう。

- (1) 民族的なマイノリティ（アイヌ民族、在日朝鮮人など）が、政治的な圧力や同化政策によって、差別と不平等に甘んじながら生活してきた。
- (2) 階級的な差別が存在していた。
- (3) 「中央」と「その他の周辺地域」の間に文化的な格差が存在していた¹⁾（国井 2001：2）。
- (4) 民俗芸能の中にも、ジェンダー²⁾の差別が続いてきた。
- (5) 明治の学校教育開始以来、洋楽偏重の音楽教育が行われてきた。

このように諸側面で、権威とその対極にあるマイノリティやその文化が存在していたことがわかります。さらに近年では、東南アジアや南米等の労働者（ニューカマー）が、都会、農村、漁村の別なく急増し、日本の産業を支える存在になっています。これにともない諸民族の文化が流入しています。日本の学校教育は、増え続ける外国人労働者の

1) 文化的な差別感、地域の方言を恥じるなどの傾向があり、日常生活の中にも現われている。ジャーナリストの国井耀毅は、「この国の情報風土は、いつの時代にも都のある『中央』へとなびく傾きを帯びており、地方の独自の生活文化や風俗習慣や独特の風物などを根底に据えて見つめていく姿勢は容易に成熟しない。」と述べ、文化の「中央」志向を指摘している。

2) 社会的、文化的に形成される男女の差異。

子どもたちをどうするのかという問題に直面しています³⁾。また、社会の急速な高齢化、少子化、加えて障害者、日雇い派遣労働者、ネットカフェ難民⁴⁾など社会的な弱者への格差の広がりが大きな問題になっています⁵⁾。このような状況から見ても、人権教育の視点をもつ多文化教育から発した多文化音楽教育が日本でも必要とされているのです。

さて、日本の音楽科の教科内容を規定する学習指導要領には、多文化音楽教育の用語はありません。しかし、マイノリティの音楽を扱う記述や背景に関わる記述も見られ、多文化音楽教育的な視点も読み取ることができます⁶⁾。昭和22年度と26年度の試案に始まり、平成20年3月の第八次改訂にいたる学習指導要領の歩みをたどると、第七次平成10年度の改訂が重要です。なぜならば、同改訂の中学校編は「曲種に応じた発声により、言葉の表現に気をつけて歌うこと」(中学校第1学年)「曲種に応じた発声により、美しい言葉の表現を工夫して歌うこと」(中学校第2学年及び第3学年の表現の内容)(文部科学省2007:60,62)を提示し、各民族の音楽の本来的な歌い方を尊重する視点が打ち出されたからです。これは、多文化音楽の指導の根幹に関わる改訂といえます。歌唱の基本となる発声法の選択は歌唱表現の根幹をなしますが、戦後一貫して頭声的な発声が重んじられてきたのです。

第八次平成20年度改訂の学習指導要領(文部科学省2008a)では、伝

-
- 3) 外国にルーツをもち日本語指導が必要な子どもを抱える学校が全国に広がっている。文部科学省調査では、2006年公立の小学校一高等学校で22,413人(朝日新聞2008.6.29)。
 - 4) いわゆるホームレスの一種で、定住する住居がなく寝泊りする場としてインターネット・カフェを利用する人々を指した造語。
 - 5) 例えば、自殺者が10年連続(1998-2007年)3万人を超した。2007年の自殺者33,093人で高齢者や30代は過去最多となっている(警視庁2008.6)。
 - 6) 「音楽を、それが生まれた環境や背景を想像したり、理解したりしながら、人間と音楽のかかわりをとらえて聴くことのできる能力を育てることをねらいとしている。音楽は、それを作り出した人や社会、生まれる状況や時代背景などと密接に結び付いている。(中略)すなわち、その時代や地域での生活や習慣、制度や伝統などの文化や歴史があつてこそ、それぞれに多様な音楽が成立しているのである。(中略)指導に当たっては、生徒自身の表現ともかかわらせたり、また、社会科の地理的分野・歴史的分野などとの関連も図ることで、背景となる文化・歴史からの理解を深め、生活の様子がうかがえるような教材や資料の活用をしたりするなどの工夫も大切である」(第2章目標及び内容(2)第1学年の鑑賞の内容)。(文部省1999b:57)

統音楽や郷土の音楽が従来より重視され⁷⁾、中学校学習指導要領解説 音楽編（文部科学省 2008b）では、多文化音楽教育の1つの視点である文化理解の側面が強められた記述になっています⁸⁾。

ここで、似ていると思われがちな、多文化音楽教育と国際理解教育の違いにも触れておきましょう。国際理解教育は、ユネスコの「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」（1974年 第18回ユネスコ総会）を理念的基盤としています。そこでは、国際理解教育は、「国家という現実に立脚しつつ、世界の平和と人類の福祉を増進するという課題に直接貢献しようとする教育」（権藤 1990: 222）と定義されています。前提となる枠組みを「国家」としています。

国際理解教育は、音楽を生み伝え発展させてきた人々の心情の理解と共感、あるいは民族の共生を目標としていません。この意味で、国際理解教育と多文化音楽教育との間には、理念や目的に明らかな違いがあります。国際理解教育は、平成10年度改訂の学習指導要領からは、新設された「総合的な学習の時間」のねらいとして記されています（文部省 1998: 3）⁹⁾。

2-2 日本における多文化音楽教育の理念と指導法の定義

「はじめに」で述べたように、日本の音楽教育は明治以来、西洋音楽な

-
- 7) 「(4) イ 歌唱教材には、次の観点から取り上げたものを含めること。(イ) 民謡、長唄などの我が国の伝統的な歌唱のうち、地域や学校、生徒の実態を考慮して、伝統的な声の特徴を感じ取れるもの」(中学校第1学年、第2学年及び第3学年 A 表現)。「(1) ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。」(中学校第1学年 B 鑑賞)。「(1) ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。」(中学校第2学年及び第3学年 B 鑑賞)(以上文部科学省 2008a: 75-77)
- 8) 「我が国や諸外国の様々な音楽は、それぞれが生み出され、はぐくまれてきた背景と切り離すことはできない。例えば音の出し方も、それをはぐくんできた人々の感性や価値観と結び付いていると考えられる。音楽がどのような風土や文化・歴史などを背景としているかといった視点をもつことが、曲のとらえ方や表現を深めることにつながっていく。」(文部科学省 2008b: 15)
- 9) 美術科では、国際理解は「文化遺産を尊重するとともに、美術を通じた国際理解を深めること」と記されている(文部省 1998: 68)が、音楽科には記載がない。

いし西洋音楽的な音楽や考え方を中心に据えてきました。その結果、日本人の多くが、自文化のアイデンティティを意識せずに音楽生活を送るばかりでなく、日本の伝統音楽に対して理解や親近感をもてなくなってしまいました。

また、教え方や伝承法には、音楽のジャンルにかかわらず、各音楽文化のエッセンスが込められているので重要です。しかし現実には西洋音楽以外の音楽を五線譜化するなど、洋楽の手法による教育が優勢で、伝承者から伝統的な方法で直接に学ぶことは、ほとんど行われませんでした。

このように偏った状況から脱却をはかる必要があるでしょう。民族的・文化的格差ゆえにこれまで学校教育が対象としなかったマイノリティの文化やその音楽文化に、私たちはぜひとも目をむけるべきだと思います。子どもたちが日本国内のマイノリティの音楽文化に目覚めれば、これを介した異文化体験の中で母文化との違いに気づき、文化的アイデンティティを確立するきっかけとなることを期待できます。そのことが、異文化受容の基盤ともなり、将来、地球市民として世界の人々と共生していく心を育むことにつながるのではないかと思うのです。以上の前提にたち、日本の多文化音楽教育の理念と指導法を次のとおり規定します。

多文化音楽教育の理念：学習者の文化的なアイデンティティの確立を目指しながら、多様な地球音楽を差別感なく受容する力を育成する。

多文化音楽教育の指導法：音楽を社会的・文化的な脈絡の中でとらえ、伝承者と文化本来の伝承法を尊重し、表現と鑑賞、構造や背景などの知的理解と創作的な活動を有機的に関連させて授業を組織し、音楽文化を育んだ人々の心情の理解を目指す。

日本におけるマイノリティの音楽文化は、グローバル化や伝承者の激減によって消滅しつつあります。また、伝承が継続していても、商業化や均一化の波をかぶって変容しています。多文化音楽教育を通じて、学び学ばれる者同士が物理的な距離を越えて交流し、励ましあってマイノリティの音楽文化を活性化することができれば、閉塞化をたどる地域が

どんなに明るくなるでしょう。そのことがひいてはマイノリティの音楽文化消滅をくい止めること（降矢 2007:11）¹⁰⁾につながるかもしれません。この体験を通して、子どもたちはやがて世界のマイノリティの音楽文化へと心を開いてゆくのではないのでしょうか。このことが多文化音楽教育の目的の1つと考えることもできるのではないのでしょうか。

10) 「多文化音楽教育シンポジウム 2007 in 東京」(2008. 3) における徳丸吉彦による基調講演。(降矢 2007 : 11-18)

第 3 章

新たな観点をもつ多文化音楽教育の指導法

3-1 視聴覚教材について

市販の視聴覚教材は、2つの目的で制作されています。1つは鑑賞用もう1つは演奏法の習得用です。鑑賞用視聴覚教材（ビデオ、LD、CD、DVD など）には、一流の演奏家による質の高い演奏が、高い技術で収録されています。これらは、近年の AV 機器の発達によって、高音質、高画質での再生が可能です。平成 10 年度の学習指導要領の改訂によって日本の伝統楽器の学習が必修となり（文部省 1998：63、文部科学省 2007：64）、伝統楽器や諸民族の楽器の演奏法習得のための教材の出版が飛躍的に増加しています。それらの多くは教師の独習用ですが、授業にも活用することができます。しかし、市販の視聴覚教材には、多文化音楽教育の視点、つまり、音楽を社会的・文化的な関わりの中で扱う視点がなく、多くの場合、音楽の背景となる情報が入っていません。

一方、世界では、音楽科の鑑賞と表現の活動を音楽活動の両側面として統一的に捉える実践が行われています（Forrai; Igó 1983）。表現活動のためには、学習者のモチベーションの喚起や演奏のモデルとして鑑賞が必要であり、鑑賞活動のためには、手がかりとしての表現活動が必要であって、両活動は、音楽活動の両輪であると考えられます。そして、このような学習を成立させるためにも、背景となる文化や人々の暮らしなどの情報が必要です。表現、鑑賞、背景などの理解の活動に、さらに応用性をもつ創作的な活動を加えると、学習者は、対象となる音楽文化に対して、より積極的に具体的な手がかりを得ることができます。私は、多文化音楽教育では、以上にあげた表現・鑑賞・知的理解・創作の4つの活動を有機的な関連をもって扱うことが大切だと考えます。

上記を踏まえて、新たな観点をもつ視聴覚教材には、1) 鑑賞と演奏法

の学習に使用できる音楽情報（表現と鑑賞のための情報）、2）背景としての文化や人々の暮らしなどの情報（背景の知的理解のための情報）が含まれることが必要だと考えます。そして、これらの音楽活動を関連させて効率的に授業を行うために、瞬時に情報を切り替えることのできるデジタル教材の利便性が求められると言えましょう。

視聴覚教材は、コンピューターやCD-ROMやDVDの出現によって、このような視点をもつ教材開発の可能性が飛躍的に高まりました。多くの情報を収録できるDVDに、表現と鑑賞、背景となる文化・暮らしなどの情報を映像や音響、写真や解説によって収録し、コンピューターとプロジェクターを用いて大型スクリーン上で活用することによって、表現、鑑賞、知的理解の3つの活動を関連させた多様な指導が可能になります。

表現と鑑賞の両活動に資する情報、背景となる文化や暮らしなどの情報、実技学習のための伝承者による学習マニュアルを収録したDVDによって、教師は、4つ目の創作の活動も関連させながら、必要な情報を必要な時、必要な回数、瞬時に学習者に提供して指導することができるようになったのです。

複製メディアによるIT情報化時代には、情報機器を活用した多様な指導法と新たな観点をもつ教材の開発が求められているのです。しかし、どのように優れた視聴覚教材であっても、万能ではありません。伝承者からの直接的な学びこそが最も重要であることを強調したいと思います。

3-2 指導法について

日本では一般的に、国内にアメリカのような民族的な問題が存在しているという認識は薄いのですが、すでに述べたように、多文化音楽教育が必要な状況になっています。しかし日本と欧米の多民族国家では、社会的・文化的な基盤が異なっています。社会背景の違いを考慮し、日本の状況に適した指導法を工夫しなければなりません。

多文化音楽教育の教材は、学習者と教師のいずれにとっても異文化である場合が多いと言えましょう。最初に、異文化という用語について概念規定をしておきましょう。私は、生まれ育つ中で身につけた文化を母

文化と呼びたいと思います。一般に人は1つの母文化を背負って成長しています。異文化とは、母文化として身につけていない、成長の過程で身につけた文化と概念規定します。

では、異文化を理解するとはどういうことを意味するのでしょうか。地球のグローバル化とともに、民族、国、社会に固有のものとして固定的にとらえられてきた文化の空間的境界が流動的なものとなっています。人々の背負う文化も流動しています。諸民族の文化は互いに影響を受けて変容し、異文化接触によって新たな文化が生まれており（中村 1985：61-68）、固定的な捉え方はできません。私は、このことを踏まえながら、文化も個人も、その根底には変容しない部分が残ると考えます。

異文化の理解は難しく、母文化を共有しない人間同士の異文化理解は、達成不可能であるとの報告もあります。異文化理解への試みは重層的で深化するものと言えましょう。異文化理解を目指す過程そのものが異文化理解と言うこともできます。異文化の理解を踏まえた多文化音楽教育は、ショーウインドーに商品を並べるように、カタログ化してあらゆる音楽を子どもたちの前に並べるということではありません¹⁾（降矢 2007：18、23-26）。

異文化音楽の指導には、音楽をそれが育まれた社会的・文化的な脈絡の中で取り扱い、人々の暮らしの中で育まれた音楽の意味を理解しようとする観点が重要です。音楽科の場合、他教科授業のように、言葉や画像・映像で説明するやり方に加えて、「第1章 アメリカの多文化音楽教育」で明らかにしたように、パフォーマンス、つまり表現の体験を通して初めて理解へと進む観点が求められます。異文化音楽の背景やその音楽を育んだ人々の生活や心情、音楽の構造や、作曲家についての知的な理解をベースにした、学習者の主体的な体験が何よりの手がかりとなるのです。

導入としての教師の実技や話、現地の自然や生活、衣食住にかかわる映像、何よりも現地の生産物などに触れる体験が学習者のモチベーションとなります。創造的な音楽活動は、異文化音楽の学習の導入としても

1) p.13注10の基調講演と、同シンポジウムのラウンドテーブル（降矢 2007：11-31）。

有効ですが、学習から得た学びをもとに新たな音楽を創るという発展的な活動としても重要です。しかし、文化を継承することなく、「自由な発想」²⁾で創作することは危険であることを忘れてはなりません。文化は、歴史的に継承と発展を繰り返しています。教育の目的もその上にあります。

新たな観点をもつ多文化音楽教育の指導法は、以下のようにまとめることができます。

- (1) 学習者が、音楽文化の育まれた土地の生産物にふれる体験を、音楽学習の導入とする。(例：楽器、衣服、民具、美術品、装飾品、食べ物など)
- (2) 教師が学習対象の音楽文化の第二次継承者³⁾として、実技の表現や語りによって、学習者の異文化学習への興味や意欲を喚起する。
- (3) 表現の体験を手がかりとして、表現と鑑賞と知的理解（音楽の構造、背景としての環境、暮らし、歴史、宗教など）、創作活動などを有機的に関連させて授業を組織する。
- (4) 音楽文化を社会的・文化的な脈絡の中でとらえ、本来の伝承の方法を尊重し、本来の唱法や楽器を用いて、第二次口頭性による映像であっても伝承者からできるだけ直接的に学ぶ場を設定する。口頭伝承によって伝承された音楽文化は、口頭伝承で伝える。

全ての音楽は、それを母文化とする伝承者から直接に学ぶことが最も有効です。伝承者による直接的な口頭性による学習が不可能で、映像による第二次口頭性から学ぶ場合であっても、伝承者から学ぶように感じることができる疑似体験の場を設定しましょう。教師は、自身の実演や語りで学習者のモチベーションを喚起した上で、伝承者とのよきパイプ役を務めることが大切です。伝承者は、学習者の実態を把握していませんから、教師が伝承者から学習者に相応しい形でそのエッセンスを引

2) 平成10年度の学習指導要領に書かれた用語。「自由な発想でつくって表現する活動」(文部省1998)。

3) 母文化ではない文化を伝承者の心をもって継承する人を表す造語。「用語の解説」p.85 参照のこと。

き出すことが必要です。また、一般的に行われがちですが、五線譜などの西洋音楽の手法を用いて西洋音楽以外の音楽文化を教えるはなりません⁴⁾。それぞれの音楽は、構造、要素、内容、考え方、意味などにおいて異なっているからです。

3-3 教師の取り組みについて

多文化音楽教育において、伝承者からの直接的な学習が可能な場合も、視聴覚教材を用いて第二次口頭性による学習を行う場合も、教師にはこれまでにない新たな観点をもつ取り組みが求められます。その理由は、扱う教材が教師にとってもこれまで触れたことのない異文化音楽である場合が多く、表現活動にしても、鑑賞活動にしても、社会的・文化的な脈絡と関連付けた指導法が求められ、新たに教材研究を行う必要があるからです。一般的に教師には、職場異動がありますから、配属された地域の音楽文化の教材研究は、その度ごとに行う必要があります。

授業において教師自身に共感のない教材を教えることは不可能です。新たな教材研究の第一歩は、フィールド・ワークを行って伝承者から学び、対象とする音楽文化についての知識と、育んだ人々の心情に理解と共感を持つことです。教師は、音楽文化の直接的な伝承者にはなれませんが、地域や地域の人々の生活における音楽文化の意味や、伝承方法などを学び⁵⁾、文化の第二次継承者となることができます。教師は、対象とする音楽文化に対する温かい眼差しや共感と一定程度の実技のできる第二次継承者になることが求められるのです。フィールド・ワークは、文化の第二次継承者への最短距離なのです。

異文化音楽の学習の際、伝承者を招聘できる場合の教師の役割は、学習者のモチベーションの喚起、伝承者とのパイプ役と伝承者からの学びの深化にあります。教師は、伝承者任せにすることなく、伝承者と事

4) 『中学音楽1 音楽のおくりもの』（三善 2006）では、日本の伝統音楽は、すべて五線譜で記されている。

5) 民族音楽学者の柘植元一はフィールド・ワークの重要性について述べている（柘植 1998：43）

前に TT (Team Teaching)⁶⁾ の方法と授業目的についての十分な話し合いを行い、伝承者の指導を生かすための周知な準備をする必要があります。伝承者は、生活の中で長い歳月をかけ、口頭伝承によって音楽文化を伝承しています。しかし伝承者にとって、音楽文化はあまりに身近であるために、その特徴や意味、伝承法などについて意識化されていない場合が多いのです。また、学習者の実態については予備知識がありません。教師の役割は重要です。

そこで教師は、伝承者に対する敬意の念を前提にして、伝承者から音楽文化や伝承法の特徴について、十分に引き出すことに配慮し、文化の第二次継承者として、伝承者と学習者との適切なパイプ役を務める必要があるのです。このような準備を行わない場合の伝承者の招聘は、学習者に感動と影響は与えますが、異文化音楽の学習の目的としての文化背景や人々の心情などの理解へと子どもたちを導くことはできません。

教師は、伝承者を招聘できる場合も、招聘できない場合も、学習者自身が気づくことのできない異文化音楽の特質や技術的な課題などについて注意を喚起し、その本質的な学びを保障することが重要です。添付の DVD 教材などの視聴覚教材を用いた第二次口頭性による学習の場合は、教師の役割はさらに重要となります。第二次口頭性による学習の場合、教師は、創意工夫によって、口頭性に劣らない質の学習にするため映像の有効な活用の工夫が求められます。この場合教師は、伝承者のようであることとその音楽文化の第二次継承者であることの 2 役を務めることが求められます。

異文化の学習の導入には、五感を働かせる直接的な体験が特に有効です。視聴覚教材による学習では、口頭伝承による学習者の実感を伴う直接的な体験が欠けてしまいます。徳丸吉彦は、口頭伝承について、口と耳だけでなく、触覚や臭覚や味覚も考慮に入れなければならないとしています (徳丸 1996: 94-95)。このような意味で、導入として学習対象とする音楽文化の育まれた土地の生産物を食べたり飲んだり、触れたり、着たりと直接触れる体験の重要度が増すのです。

6) 教授組織改善の 1 つの方式である。

新たな観点をもつ教師の取り組みは、以下の3点にまとめられます。

- (1) フィールド・ワークを行い、伝承者から、民俗や音楽文化について学び、できるだけ伝承者から実技の学習を行い、学習者に伝える内容を吟味すること。
- (2) 学習目的と指導法、伝承者とのTTのあり方（第二次口頭性による場合も）を探究すること。
- (3) 導入として、音楽以外の生産物にふれる直接体験や、教師の第二次継承者としての実技や語りによって学習者への興味・関心・意欲を喚起し、伝承者からの学びを深化すること。

3-4 授業設計について

授業設計のための新たな観点は、学習者自身の音楽や音楽体験から出発し、異文化の学習を経て再び学習者自身を見つめ直すという、自己確認の側面です。上記の観点に立って、できるだけ伝承者による直接的な学習の成立と自己確認を経た学習者の文化的アイデンティティの確立という2つの目的を考えたいと思います。これは、視聴覚教材による第二次口頭性による学習であっても同様です。多文化音楽教育は、地元地域の音楽文化があれば、そこから始めるのが最も有効です。地元地域の音楽文化を扱う有効性は、以下の4点にまとめられます。

- (1) 伝承者が身近にいて、教師の事前学習も、学習者の学習も直接的に伝承者から学習できる。
- (2) 学習者の文化的アイデンティティの確立に有効である。
- (3) 音楽文化の背景としての地域の特性や民俗を伝承者から直接学ぶことができる。
- (4) 文化の中央集権化が進み、国内の音楽文化の多様性が失われつつある現状を、食い止めることができる可能性がある。

一部の巨大化した新しい民俗芸能⁷⁾を除いて、今日では、学習者も教

7) ヨサコイソーランや故郷創作太鼓など。

師も、地元地域に伝承される音楽文化に気づかなくなっています。「地元地域の音楽文化から始める」という発想は、グローバル化した文化にさらされている子どもたちの現状には、そぐわないかもしれません。大都市には民謡、民俗芸能など母文化となる文化の伝承が途切れているところもあります。また、地域にそれらが伝承されていないところも増え、伝承されていても子どもや学校とは関わりのない場合が多いからです。

しかし、このような理由で、地元地域の音楽文化を扱わない場合にも、多文化音楽教育は学習者自身の音楽文化の世界から出発し、異文化音楽の学習を経て、再び学習者に戻る形で授業設計をするという観点をもつべきでしょう。異文化理解や多文化音楽教育の目的の1つは、学習を通して自己の文化的なアイデンティティをみつめることにあるからです。地域に民謡や民俗芸能などが伝承されていない場合は、学習者の音楽体験を観察し、ある程度類似性をもつ他地域の民俗音楽、あるいは、全国の民俗音楽の中で、学習者の現状に即した教材を選ぶとよいでしょう。また、保護者や祖父母の世代の地域の方から、子ども時代に遊んだわらべうたを学ぶフィールド・ワークを行うことも有効です。

多文化音楽教育の授業設計の観点は、以下の4点にまとめられます。

- (1) 学習者自身の音楽の世界から（できれば地元地域の文化から）異文化音楽の学習を始めること。
- (2) 学習対象の異文化音楽の背景に対して、五感による直接的な体験をさせること。
- (3) 学習者のもつ音楽文化と学習対象の異文化音楽の共通性と異文化性に気づくこと。
- (4) これらの学習成果を踏まえて、再び学習者のもつ音楽文化（地元地域の音楽文化）に立ちかえり、学習を通して自己の文化的なアイデンティティをみつめること。

以上に述べた多文化音楽教育の新たな観点をもつ視聴覚教材、指導法の具体化、教師の取り組み、授業設計による異文化音楽の学習は、学習者と教師の両者に変容をもたらし、身近にある異文化を受容する力を育むでしょう。そして、国内にあるマイノリティの人々やその文化の存在

や無意識的な「中央」と「その他の周辺地域」の文化という文化格差や差別に気づききっかけを得るのではないのでしょうか。それは、世界に生きるマイノリティの人々の存在や無意識的な文化の差別に気づくことにもつながり、国内外にある多様な音楽文化を差別感なく受容する力を育むことになるでしょう。この意味で、日本における多文化音楽教育も、人間教育としての多文化教育の本来的な理念を踏まえることになるのです。

第 4 章

新たな観点をもつ多文化音楽教育の授業設計

添付した DVD 教材を用いた授業設計を提案します。これらの授業は、すでに様々な形で実践され、異文化受容について学習者と教師の双方に一定の変容をもたらしました¹⁾。まず、DVD 教材について制作意図、教材選択理由、意義、内容、使用法、教師の準備、使用上の留意点について説明します。

4-1 多文化音楽学習 DVD 教材について

DVD 教材は、アイヌ民族の音楽文化学習、^{しいば}椎葉の音楽文化学習、竹富島の音楽文化学習、バリ島の音楽文化学習の 4 種です。他に五箇山民謡「こきりこ」の DVD をゲッツとファーンと共同制作しました。これは、ゲッツの GVIS のシリーズに収められています²⁾。



白老ポロトコタンのカムイノミの儀式

制作意図は、以下の 10 点です。

- (1) 音楽文化の表現・鑑賞の学習を、背景である諸要素（自然、生活、生活習慣、宗教など）と切り離すことなく、総合的に扱えるように構成する。
- (2) 民俗音楽は多くの場合、音楽と踊り（あるいは所作）は切り離せない

1) 2004 年度から 2006 年度にわたり、小学校、中学校、高等学校、教員養成大学、特別支援学校の教師十数名と提起した多文化音楽教育の理念と指導法に基づき、開発した DVD 教材を用い、授業方法と DVD 教材の有効性について検証し、2004 年度、2005 年度、2006 年度の日本音楽教育学会の全国大会において共同企画として発表した。また、福島、京都、東京で多文化音楽教育シンポジウムを開催して、その研究成果を発表した。

2) 前掲書 p.6 注 10。

形で存在しているので、音楽と踊りの両方を切り離すことなく学べるように構成する。

- (3) 音楽文化本来の伝承方法を尊重し、本来的な唱法や楽器を用い、伝承者を見ながら直接的に学ぶように構成する。
- (4) 学習の活動を通して、最終的には個々の音楽を育み、継承発展させてきた人々の心の理解と共感を目指すことのできるような情報を収録する。
- (5) 表現の体験は、文化理解への最も大きな手がかりなので、音楽表現の背景となる文化的な情報を有機的に関連させて扱うことができるように構成する。
- (6) 表現の体験のために、伝承者による実技学習マニュアルを収録する。
- (7) 子どもに焦点をあて、子どもの芸能や学習場面を収録する。
- (8) 人々の心の理解と共感を目指すことができるように、芸能の中にある祈り、地域の伝統的な手作業や食べ物の情報を収録する。
- (9) 演奏者や資料提供は、それぞれの文化の演奏、研究を代表する担い手とする。
- (10) フィールド・ワークを行うことのできない教師に対して、学習に十分な情報を網羅する。

このDVD教材では、おそらく多くの教師や学習者が体験したことがないと思われる異文化の中から、異文化受容の教材として学習効果が期待できる音楽文化を取り上げました。これらは子どもの音楽体験を豊かにし、地球音楽の受容の窓口を拡げる可能性を秘めています。具体的な選択理由と、その対象は以下のとおりです。



竹富島の種子取祭 庭の芸能「ジッチュ」

- (1) 義務教育の中で扱われてこなかった国内のマイノリティの音楽文化；
 - i 北海道アイヌ民族の音楽文化
 - ii 沖縄県八重山郡竹富島の音楽文化

- (2) 義務教育の中で扱われてこなかった異文化性の強い国内の音楽文化；
宮崎県椎葉の音楽文化
- (3) 音楽に現われる二元論³⁾を体験することのできる音楽文化；バリ島の
音楽文化
- (4) 合掌造りの家などの文化背景と日本音楽の歌、踊り、楽器の3つを総
合的に学習できる教材；五箇山民謡「こきりこ」

DVD教材を用いた実技体験を通して、以下の学習を行うことができます。

- 1) 北海道アイヌ民族の音楽文化
 - (1) 「ウポポ」(歌)のもつカノンの様式。
 - (2) 「リムセ」⁴⁾(踊り)のもつリズム感。
 - (3) 「ムックリ」(楽器)のもつ倍音の響きと世界の口琴文化への広がり。
音楽を創る体験。
 - (4) アイヌ民族の儀式、カムイノミやイチャルパなど文化背景の学習。
 - (5) アイヌ語やアイヌ民族の食べ物や衣服など暮らしの学習。
- 2) 沖縄県八重山郡竹富島の音楽文化
 - (1) 琉球音階による竹富島のわらべうたと民謡。
 - (2) ^{たなどうい}種子取祭の芸能とユークイなどの芸能を支える行事。
 - (3) ^{かんつかさ}神司による民間宗教、^{かみぬく}亀甲墓などに象徴される竹富島の祈りと暮
らし。
 - (4) 伝統文化としての八重山のミンサー織りと子どものミンサー織り
の学習。
 - (5) 伝承者からの「ジッチュ」の踊りと^{さんしん}三線の学習。
- 3) 宮崎県椎葉の音楽文化
 - (1) 椎葉の子守唄や民謡。
 - (2) 椎葉夜神楽の準備や演目、神楽の伝承方法。

3) 宗教で、世界を光と闇^{やみ}、善と悪など、相対立する2つの原理の闘争として説明する立場。

4) リムセと呼ばれるアイヌ民族の古式舞踊は、1984年に国の重要無形民俗文化財に指定され、2009年9月にはユネスコ(国連教育科学文化機関)の無形文化遺産に記載されることが決まった。

- (3) 椎葉の暮らし、焼畑農業、椎葉蜂蜜、手揉み茶作りなど。
 - (4) 食生活と椎葉のことば。
 - (5) 伝承者からの「大神神楽」の笛と踊りの学習、御幣作りの学習。
- 4) バリ島の音楽文化

- (1) 音楽文化に反映される二元論の考え方。音楽に反映される二元論（ゴン・クビャール⁵⁾の2台で1組の楽器から発するうなりや「つがいリズム」⁶⁾、ケチャ⁷⁾のパターンの合唱)。



しめひききじん
嶽之枝尾神楽の「注縄引鬼神」

- (2) 指揮者のいないアンサンブルによるコミュニケーション力の育成。様々なしかけによる指揮者のいないケチャやガムランのアンサンブルによるコミュニケーション力の育成。
- (3) 芸能と祈りの関係。

西洋クラシック音楽の自己表現という音楽のあり方と異なる、バリ・ヒンドゥー教⁸⁾の神々への捧げものという芸能のあり方。



バリ島のケチャ

- (4) 音楽と舞踊の結びつきと異文化性。

学校教育で教材として用い

- 5) 以前からあったガムラン音楽を基に、1930年頃から新しい楽器類を加えて開発されたもので、ウガル、プマデ、カンティル、ゴン（日本では、ゴングと呼ばれていることが多い）、レヨン、クンダン、スリンなどの楽器で構成される。クビャールとは、「マッチの炎のように燃え上がる」の意味で、大編成の楽器群によって華やかで迫力のあるこの演奏形態は、近年最も一般化している。
- 6) バリ島ではコテカンと呼ばれる。入れ子になったリズム。インターロッキングとも呼ばれる。
- 7) アルファベット表記（Kecsak）からケチャ、あるいは、ケチャックなど書かれる場合もあるが、バリ島では、チャと呼ばれている。本書では、一般性をとって、ケチャと表記した。また、モンキーダンスなどと解説されることがあるが誤りである。
- 8) 多神教。バリ島に伝来して土着の民間信仰と結びついたバリ島独自のあり方をもつヒンドゥー教。

られる西洋音楽では体験しにくい音楽と舞踊の直接的な結びつきや、初心者が学習を始める最初の瞬間から技術的な習熟度に関わらず体験することができる異文化性⁹⁾。

5) 五箇山民謡「こきりこ」

- (1) 五箇山のわらべうたと民謡。
- (2) 合掌造りの知恵と紙漉き^{かみす}などの暮らし。
- (3) 伝承者による五箇山民謡「こきりこ」¹⁰⁾による歌、踊り、楽器の学習¹¹⁾。
- (4) 伝承者によるわらべうたの学習。



五箇山民謡「こきりこ」の
ささら踊り

DVD教材は、創意工夫によって、以下のように授業、ワークショップ、個人学習など、幅広い目的に使用できます。

- (1) 教師の文化学習や実技学習。
- (2) 学習者の文化学習や実技学習。
- (3) 表現の活動を手がかりにした多文化音楽教育。
- (4) 学習者のコンピューターを活用した調べ学習。

DVD教材は第二次口頭性による学習のためのものなので、授業で活用する場合は以下の4点に留意して、学習者の直接的な体験を大切にしましょう。

- (1) 口頭伝承によって、五線譜やメモなどに置き換えることなく模倣する。
- (2) 現地の本物の生産物を入手し、学習者が現地のものを食べたり、

9) バリ島の音楽文化以外にも、雅楽など優れた異文化性を学ぶことのできるアンサンブルはあるが、それらは、個別の演奏法の習得に時間がかかり、学校教育の場で、短時間で異文化受容を意図するのに困難が大きい。

10) 前掲書 p.6 注 10、または『DVDでまなぶ・おぼえる 富山県五箇山 こきりこ』(2005 越中五箇山筑子唄保存会) に収められている。

11) 民衆の楽器、こきりこ、太鼓、篠笛、ささら、棒ざさらなどが用いられる。

手でさわったり、音を出したりという五感による直接体験を重視する。

- (3) 音楽と踊りや実技学習と文化理解を切り離すことなく、有機的に関連づけて扱う。
- (4) 学習者が直接に現地の伝承者から学ぶような気持ちになることができる場面設定をする。

DVD教材による第二次口頭性で授業を行った場合、その後、何らかの形で学習者が現地の伝承者から直接に学ぶ場や、本物の演奏にふれる場を作ることを心がけましょう。異文化音楽学習は実技の体験を手がかりとして、伝承者の生演奏の深い鑑賞を行うことで達成されるのです。

4-2 多文化音楽学習DVD教材を用いた授業設計

学習者にはすでに学校教育や社会環境の中で、西洋的な音楽性が身に付いています。異文化音楽の指導にあたって、学習者の異文化性に対する拒否感を予測して、抵抗感を少なくするために西洋音楽的な手法を用いて導入する傾向も見られます¹²⁾。

音楽文化は、それぞれ独自性と共通する側面の両方をもっています。私は、教師が十分な準備を行って、馴染みのない異文化性を薄めるのではなく、出会いの瞬間から、異文化性に出会わせる工夫をし、異文化の特徴や独自性と共通性を十分に体験させることが大切だと考えます。そのためにも、教師は授業の導入や経過の中で、第二次継承者として学習者の意欲を十分に喚起したいものです。

日本の伝統音楽や諸民族の音楽を扱う場合に、代用品として西洋楽器を用いたり、五線譜を用いて指導するという方法をとると、学習者は西洋の音楽観でその他の音楽文化を考えたり感じたりすることになり、異文化体験とはなりません。

12) 皆川厚一は、LD『必携・新しい“世界の音楽”学習への手引き アジアの音楽と文化』（山口他 1998）において、ケチャの指導にあたって、バリ人に立たせてパターンを手拍子させ、高校生にウッドブロックなどの西洋楽器を用いて指導している。

以下の5つの授業設計は、小学生から大学生、一般まで幅広い年齢層の学習者を対象にしています。そのために、高度な内容にまで発展させています。内容や時数は、学習対象者に合わせて、組み替えてください。時数としてはおよそ、7-8時間を考えています。

4-2-1 アイヌ民族の音楽文化による授業設計

1) 他教科との連携

音楽科に加えて、以下のトピックを扱うことで、他教科と連携した授業を行ったり、総合的な学習の時間の中で活用したり、ワークショップを行うことができます。

- (1) 国語科 アイヌ語、ユーカラ
- (2) 社会科 歴史、北海道旧土人保護法、同化政策と差別、アイヌ新法、儀式、縄文文化¹³⁾
- (3) 家庭科 伝統的な食べ物、衣服、刺繍、住居
- (4) 図画工作科 文様、民具、木彫（未収録）
- (5) 体育科 リムセ（古式舞踊）
- (6) 道徳 環境との調和、差別
- (7) 環境教育 自然観
- (8) 総合的な学習としてそれらの複合学習

2) 教材性と授業のねらい

本土の音楽文化と異なる日本の先住民族であるアイヌ民族¹⁴⁾の音楽文化の受容とそこから諸民族の音楽への広がりやねらいとします。アイヌ民族の文化に触れたことのない人にとっては、ウポポ、リムセ、ムックリ、アイヌ語といずれをとっても馴染みがありません。しかし、伝統的な座り歌ウポポは、西洋のカノンへ、ムックリは、サハなど世界の各

13) アイヌ民族は、縄文人の系譜を継いでいるとされる。

14) アイヌ民族が日本の先住民族であることを認める「アイヌ民族を先住民族とすることを求める国会決議」が決議されたのは、2008年6月6日である。1997年まで、旧土人法（北海道旧土人保護法 明治32年に制定）と呼ばれる法律があり、アイヌ民族は、明治時代からその言語や慣習などを禁じられた。

地に伝わる口琴文化の世界への広がりをもっています。アイヌ語は、弾圧によって一時期伝承が途絶えましたが¹⁵⁾、日本語にない美しさを持っています。アイヌ語で「言葉」は「イタク」（そこに存在する魂）、「会話」は「ウコイタク」（互いにそこに存在する魂を揺り動かす）（岡田2008）ということなどを伝えたいものです。



ムックリを吹く子どもたち
福島県会津若松市立日新小学校

もう1つのねらいは、アイヌ民族が受けてきたマイノリティとしての差別と不平等への歴史的な事実気づくことにあります。アイヌ民族は、アメリカやカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど他の地域の先住民と同じように、侵略と差別と自文化抑圧の歴史をもち、この歴史を音楽学習の背景として学ぶことは、他の被抑圧の歴史から生まれた音楽文化¹⁶⁾の理解のための土壌となり得るでしょう。

授業には、匂いをかいだり食べたり、触ったり着たりすることができるように、以下のような現地の生産物などを用意し、直接体験の場を設けると理解が促されます。

(1)北海道の自然、刺繍を施した衣装や家、舟などの写真、(2)ムックリ、(3)刺繍を施したマタンブシ、小物など、(4)ソトバ、行者ニンニクなど伝統的な食べ物、(5)木彫¹⁷⁾。

3) DVD教材を用いた授業モデル

以下のような学習過程による授業モデルを組み立てることができます。

-
- 15) 現在は、財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構の監修のもとに、STVラジオが制作するアイヌ語講座などが行われ、『アイヌ語文法の基礎』（佐藤知巳：2008：大学書林）も出版され、一般化の広がりが見られる。
 - 16) 20世紀に生まれたジャズは、グローバル化したロックやポピュラー音楽の手法の原点となるが、アフリカ系アメリカ人の奴隷制度の差別と抑圧を経て生まれたアフリカとアメリカのクレオール音楽といえる。
 - 17) 社団法人 北海道ウタリ協会 (<http://www.ainu-assn.or.jp/>) や釧路・根室・阿寒湖のアイヌコタンなどで入手できる。

添付のDVD教材を用いなくても様々な映像¹⁸⁾等を用いて、この授業モデルを応用して多様な授業を組み立てることができます。

(1) 導入：アイヌ民族の音楽文化のもつ異文化性との出会い

- i ウポポ（座り歌）（「サーオイ」や「イカムッカーサンケー」など）を教師の音頭を追いかけながら歌わせる。
- ii これまで歌った西洋のカノンを歌わせ、西洋のカノンとウポポを歌ったときとの気持ちの違いを話し合わせ、その理由について考えさせる。アイヌ民族の歌と西洋のカノンの共通性と相違性に気づかせる。
- iii ウポポの映像を見て、一緒にウポポを歌う。衣装に注目させる。

(2) 展開：

第一段階：異文化性の学習1 アイヌ民族の文化と歴史との出会い

- i アイヌ民族の衣服や刺繍、文様の意味を学ばせ、本土の刺繍や西洋の刺繍などとの違いや共通性について話し合わせる。
- ii 映像からアイヌ語の片言を話させる。北海道や東北に残るアイヌ語の地名について調べ、アイヌ民族が北海道の先住民族であることに気づかせる。
- iii アイヌ民族の歴史と差別の学習を行う。
- iv アイヌ民話を読み、口頭伝承とユーカラについて学び、アイヌ民族の人たちの考え方¹⁹⁾について話し合わせる。世界の口頭伝承や口頭文芸²⁰⁾についても知らせる。
- v DVD教材からカムイノミやイヨマンテなどの儀式の映像を見せる。
- vi 体験したアイヌ民族の文化についての感想を話し合わせる。

第二段階：異文化性の学習2 ムックリから世界の口琴文化へ

- i ムックリは多文化音楽学習の教材として、幅広い可能性を持つ

18) 財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構 (<http://www.frpac.or.jp/>) では、多くの映像資料の貸し出し等を行っている。

19) 神々への祈りの心や自然の恵みに感謝し、環境と調和しながら自然を活用する考え方。

20) 神話や叙事詩、伝説、民俗語彙など口頭で伝承されるもの。アメリカの先住民族の神話やフィンランドのカレワラのように多数存在している。

- ている²¹⁾。教師がムックリを吹き、小さなムックリから多様な音が生まれ、自分で音楽を創っていくことを聴き取らせる。
- ii DVD教材を使って、ムックリのもち方、弁の振わせ方（手首のノックの仕方）、鳴らし方（舌などの使い方）の基本を教える。ムックリを鳴らす練習をさせる。
 - iii DVD教材から、弟子シギ子²²⁾のムックリの演奏を鑑賞させる。
 - iv 視聴覚教材²³⁾を用いて、フィリピンやベトナムの竹の口琴を聴かせる。感想を話し合わせ、次に銅鉄製のサハヤハンガリーなどの口琴を聴かせる。
 - v アイヌ民族のムックリがアジアや世界の口琴文化への広がりをもっていることに気づかせ、感想を話し合わせる。
 - vi アイヌ民族の他にも、世界には、差別されてきた先住民族がいることを学ばせる。
- (3) まとめ：リムセを全員で踊る
- i 教師の踊りからリムセ「ウタリオープンパレワ（さあ、立ち上がって踊ろう）」を学ばせ、リズムの違いを丁寧伝えた後、映像から踊り方を学ばせる。
 - ii 教師を交えて全員で歌い踊る。

4-2-2 椎葉の音楽文化による授業設計

1) 他教科との連携

音楽科に加えて、以下のトピックを扱って、他教科と連携した授業を行ったり、総合的な学習の時間の中で活用したり、ワークショップを行うことができます。

- (1) 国語科 昔話、椎葉のことは

-
- 21) 楽譜に記録される音楽ではなく、1. 自由にメロディーを作って吹く楽器である。2. 倍音を聞くことから、ホーミーなどの倍音唱法への広がり可能性がある。3. アジアに広がる竹の口琴文化への広がりをもつ。4. 生涯にわたって身近において楽しむことのできる楽器としての可能性がある。
 - 22) 阿寒湖アイヌコタン在住、ムックリの名手。阿寒湖口琴協会代表。世界口琴大会に3回出場した。著書に『私のコタン』（弟子 2001）がある。
 - 23) 日本口琴協会 (<http://www.koukin.jp/>) が『サハ民族の口琴 ホームスの演奏技法 (video color 50min 1993/99)』を制作販売している。

- (2) 社会科 やきはた 焼畑農業、林業
- (3) 家庭科 ても 椎葉の手揉み茶、伝統的な食べ物、手まり作り
- (4) 図画工作科 しめ みこうや そとこうや 注縄、御神屋、外神屋の飾り物
- (5) 体育科 かぐらまい 神楽舞の舞
- (6) 道徳 狩猟生活と山の神信仰
- (7) 環境教育 照葉樹林と自然
- (8) 総合的な学習としてそれらの複合学習

2) 教材性と授業のねらい

椎葉の音楽文化、焼畑農業²⁴⁾や蜂の子や鹿肉などを食す食文化、狩猟生活と山の神信仰などは、日本人にとって古くからあった生活慣習と言えますが、他の地域の子どもにとっては馴染みがありません。神楽は、日本全国で行われている民俗芸能ですが、椎葉村では、20を超える地域で夜神楽と呼ばれる神楽が伝承されています。神楽の中では、村人が囃し立てる独特のセリ歌も歌われ、演じ手と観衆が一体となって夜を徹して演じ楽しまれていて、神楽の古い形に触れることができます。椎葉には、神楽の他にも豊富な民俗芸能や民謡が伝承されています。また、椎葉の音楽文化は、日本の他の地域やアジアの諸民族の食生活や音楽文化への広がりをもっています。授業のねらいは、辺境の地にあって豊かな椎葉の音楽文化をその背景とともに知ることを通して、アジアの諸民族の音楽へと拡がる共通性に気づかせることにあります。

授業には、匂いをかいだり食べたり、触ったり着たりすることができるように、以下のような現地の生産物などを用意し、直接体験の場を設けると理解が促されます。

- (1)椎葉の山々、焼畑、神楽の写真、(2)神楽太鼓や篠笛、(3)椎葉茶や稗ひえや粟あわ、(4)日本蜂の蜜、(5)神楽の御幣ごへえなど²⁵⁾。

24) 学校行事その他で臨時的に取り組まれることがあるが、現在は、一般的には行われていない。

25) 椎葉民俗芸能博物館 (<http://www.shiiba-soed.jp/>)、椎葉村商工会 (<http://www.miya-shoko.or.jp/siiba/>) などで入手できる。

3) DVD教材を用いた授業モデル

以下のような学習過程による授業モデルを組み立てることができます²⁶⁾。

(1) 導入：椎葉の自然や焼畑などの暮らし、神楽との出会い

- i 嶽之枝尾神楽の演目の1つ「注縄引鬼神」^{しめひききじん}を一部鑑賞させる。
- ii 自由な感想から、椎葉の自然や暮らし、この神楽の演目がどのようなものであるかを想像させ話し合わせる。
- iii 手に入れば、椎葉茶や蜂蜜を食す体験をさせる。
- iv 椎葉の自然や地理など映像や写真によって学習させる。
- v 焼畑農業の映像を見せ、日本各地やアジアにも広がる焼畑農業について学習させる。自然の活用と自然破壊について話し合わせる。
- vi 稗や粟を実際に見せ、椎葉の食文化・蜂の子や蜂蜜採りの学習をさせる。
- vii 椎葉の自然、焼畑、神楽、食文化について感想を話し合わせる。



椎葉の神楽太鼓を叩く子どもたち
福島県伊達郡川俣町立福沢小学校

(2) 展開：

第一段階：神楽太鼓と神楽舞の基礎の体験

- i 映像から注縄の大祭の赤、緑、白の華やかな注縄立^{しめたて}を見せる。
- ii 教師が、神楽太鼓の基礎を打って聴かせる。
- iii 神楽の準備の映像から、祝子^{ほうりこ}²⁷⁾が太鼓や舞の練習をしている様子を見せる。
- iv 大祭の注縄や祝子の太鼓や舞の練習をしている様子を見た感想を話し合わせる。

第二段階：神楽太鼓の基礎学習

- i 教師が唱歌^{しょうが}を唱えて基本パターン1、基本パターン2を、膝を打つ

26) 福島県二本松市立二本松北小学校の山崎純子が、福島県伊達郡川俣町立福沢小学校で、椎葉の音楽文化を学ぶ実践を行った（降矢 2007：160-161）。

27) 椎葉の夜神楽の舞手の呼称。

て示し、学習者に唱歌を唱わせ膝を打たせる。

- ii 映像から伝承者中瀬竹利の太鼓の基本パターン 1、基本パターン 2 を、叩き方を見ながら学ばせる。
- iii 神楽の演目のうち、「願成就なかせたけとし（大神）神楽」の一部を見せて、太鼓のパターンを聴き取らせる。
- iv 映像に合わせて唱歌しょうがを唱え、膝を打たせる。

第三段階：神楽舞の基礎学習と神楽を盛り上げるセリ歌

- i 教師が神楽太鼓の唱歌を唱えながら、舞の基礎の動きを教える。
- ii 神楽の準備の映像から、祝子の太鼓の練習をしている様子の映像を見せる。
- iii 映像から鈴おろしと神楽舞の足運びを見せて、伝承者から舞の初歩的な足運びを学ぶ体験をさせる。
- iv 再び「願成就（大神）神楽」の一部を見せて、舞の足運びを確認させる。
- v 神楽舞について、実際に試してみた感想を話し合わせる。
- vi 教師がセリ歌の説明をし、映像から神楽セリ歌の映像を見せる。
- vii 映像から、地域の人々全員で準備する様子を見せる。
- viii 全員で準備し、セリ歌を歌って見物人も参加する椎葉の神楽と神楽を支える人々の心や神楽の伝承の方法についての感想を話し合わせる。

第四段階：嶽之枝尾神楽の鑑賞とアジアへの拡がり

- i 神楽の演目のうち、映像から「子ども神楽」を見せ、セリ歌や演者と聴衆が一体になって盛り上がる様子を鑑賞させる。最初に見せた「注縄引鬼神しめひききじん」や嶽之枝尾神楽の代表的な演目である「星指ほしさし」なども一部鑑賞させる。時間があれば、椎葉の子守唄を聴かせる。
- ii アジアの各地で行われている焼畑農業や仮面を付けた舞踊などを見せ、日本の文化のアジアへのつながりについて語る。
- iii 椎葉の神楽、アジアの芸能、地元地域の芸能について学んだ感想を話し合わせる。

(3) まとめ：神楽太鼓を打って、舞の基礎を踏む

神楽太鼓に合わせて、全員で舞の基礎を合わせる。

4-2-3 竹富島の音楽文化による授業設計

1) 他教科との連携

音楽科に加えて、以下のトピックを扱うことで、他教科と連携した授業を行ったり、総合的な学習の時間の中で活用したり、ワークショップを行うことができます。

- (1) 国語科 昔話
- (2) 社会科 人頭税²⁸⁾ や方言札²⁹⁾ などの歴史、重要伝統的建造物群保存地区の町並み保存
- (3) 家庭科 伝統的な食べ物、八重山ミンサー織り³⁰⁾ などの織物
- (4) 図画工作科 シーサー³¹⁾
- (5) 体育科 種子取祭 (たねとりさい) の芸能、わらべうた (動きを伴う表現)
- (6) 道徳 「安里屋ユンタ」³²⁾ とクヤマの物語
- (7) 環境教育 珊瑚礁、竹富島の動植物、自然保護
- (8) 総合的な学習としてそれらの複合学習

2) 教材性と授業のねらい

竹富島の音楽文化は、本土とは異なる沖縄の民間宗教である神に仕える神司とその祈り、そして島民全員が参加する約300年の歴史をもつ種子取祭に象徴されると言えましょう。³³⁾ 琉球弧³³⁾ のわらべうたや民謡の多

-
- 28) 担税能力の差に関係なく、各個人に対して一律に同額を課する租税で、竹富島では、1637年(寛永14年)から1903年まで、15歳から50歳までの男女は役人や身障者以外すべて貢租の負担者となった。
 - 29) 学校で方言を使うと、見せしめに方言札を首から吊り下げさせられるなど、徹底して方言を排除する教育が行われていた。明治時代に取り入れられ、昭和40年ごろまで続いた。
 - 30) 綿糸を藍で染めて織った細帯で、5つの緋柄と4つの緋柄を特徴とする。
 - 31) シーサーは中国から伝わった魔よけの獅子で、広く沖縄一帯の家屋の屋根に飾られている。
 - 32) 沖縄県八重山諸島に伝承される歌謡。多くは長編の叙事詩で、労働の際に男女掛け合いで歌われる。
 - 33) 日本列島西南端の九州島から南約1,260kmの洋上に分布する199余の島々で、地

くは、琉球音階³⁴⁾でできていますから、南へと広がるフィリピン、インドネシアなどアジアの音楽文化へのつながりを感じることができます。ユークイ³⁵⁾の銅鑼は、中国やフィリピンなどの銅鑼の音楽と共通性が感じられます。神司は、朝鮮半島のムーダン（巫女³⁶⁾）とも共通点をもっています。竹富島の音楽文化の学習では、本土の音楽文化との異文化性と共通性に気づくこと、アジアの文化へのつながりを学習させることがねらいとなります。

授業には、匂いをかいだり食べたり、触ったり着たりすることができるよう、以下のような現地の生産物などを用意し、直接体験の場を設けると理解が促されます。

(1) 亜熱帯の植物、珊瑚礁さんごしょうの美しい海岸、掃き清められた珊瑚礁による白砂の道などの大きな写真、(2) 珊瑚礁の白砂、(3) サンピン茶せんぺいと黒糖くろとう、インスタントのソーキそば、アンダギー、もずく、シークアンサー、ゴーヤなどの食べ物、(4) 三線さんしん、(5) くば笠、八重山ミンサー織りの民芸品など³⁷⁾。

3) DVD教材を用いた授業モデル

以下のような学習過程による授業モデルを組み立てることができます。添付のDVD教材以外の様々な映像³⁸⁾等を用いて、この授業モデルを活用して授業やワークショップを組み立てることができます。

(1) 導入：竹富島のわらべうた遊びと背景の学習

- i 教師の歌と遊びで竹富島のわらべうた「牛ぬばん ソレソレ」を覚えさせる。
- ii DVD教材から竹富島のわらべうた「牛ぬばん ソレソレ」を見

理学上で「南西諸島」、「琉球列島」などと総称される。

34) 移動ドでは、ドミファソシドの音階。バリ島のペログ音階に通じる。

35) 種子取祭で行われる、豊作を祈る行事で、「世乞い」。道歌、庭歌（巻き歌・シキドロー）、座敷歌（稲が種子アヨー・根うりユンタ）があり、「巻き歌」は、神司を先頭にしたユークイ人と迎える主人側の応答の歌となっている。

36) 朝鮮半島の伝統的な女性のシャーマン。

37) 各地で開催される沖縄物産展や沖縄の食品等を扱った店、竹富島民芸館などで入手可能である。

38) 豊富な資料や特産物を全国竹富島文化協会（<http://www.napcoti.com/>）、喜宝院・蒐集館きほういん（<http://www2.tontonme.ne.jp/users/kihouin/>）を通して得ることができる。

- て遊ばせる。本土の「ずいずいずつころばし」を遊ばせ、比較させる。
- iii 映像の「牛ぬばん ソレソレ」の遊ばれる竹富島の赤瓦の屋根、珊瑚の塀、珊瑚の白砂の道に注目させる。
 - iv 竹富島の食べ物を食べさせたり、八重山のミンサー織り³⁹⁾を見せたりする。
 - v i - ivの活動から自由な感想を話し合わせる。
 - vi DVD教材から、竹富島の自然や町並み保存などについて学ばせる。
 - vii DVD教材から竹富小学校の子どもの地域学習八重山のミンサー織りを見せて、竹富島の織物について調べ学習をさせる。



沖縄の三線の授業風景
宮城県白石女子高等学校

(2) 展開：

第一段階：竹富島のわらべうたと民謡⁴⁰⁾

- i DVD教材から上勢頭同子⁴¹⁾のわらべうた「ふーゆべまー」、「ピビジャー」を見せて模倣して学ばせる。
- ii 可能であれば、三線^{さんしん}に触れ、沖縄の音階や音色を感じさせる。
- iii DVD教材から「安里屋ユンタ」の話聞かせ、共通語歌詞の「安里屋ユンタ」を歌った後、竹富島の言葉による歌詞を言わせる。
- iv DVD教材から「安里屋ユンタ」を鑑賞させる。

第二段階：文化背景の学習 1 竹富島の祈りと種子取祭の学習

- i 竹富島のお墓と本土のお墓の違いを話し合わせる。神司とその

39) 八重山で作られている八重山上布と八重山ミンサー織りは、国の伝統工芸品に指定されている。織物の中に5つと4つの四角模様が織り込まれ、何時の世までもと女性がその思いを織り込んだと言われる。

40) わらべうたの曲名の表記は、LP『竹富島のわらべうた』（高江洲 1979）による。

41) 上勢頭亨の長女、竹富島のわらべうたや民謡を亨から受け継いだ。CD『竹富島のわらべうた』（高江洲 2002）リリース。添付のDVD教材で歌唱している。

祈りについて学ばせ、DVD教材から神司の祈りを見せる。

- ii DVD教材から、種子取祭の朝と夜のユークイの映像を見せて、神司の役割を実感させる。種子取祭の話と準備や食べ物について学ばせる。
- iii 種子取祭の食べ物、蛸とにんにくの酢漬けを作っておいて食べさせる。
- iv DVD教材から種子取祭の神司の踊り「スーブドゥイ」を見せる。

第三段階：竹富島の芸能に現われた伝統と現代

- i 全島民をあげて継承している種子取祭と人々の関わり、神への捧げものとして執り行われる芸能について、DVD教材から学ばせる。
- ii 種子取祭の庭の芸能から、「ジッチュ」、「ウディボウ」、奉納芸能から「ミルク」を見せて感想を話し合わせる。
- iii ビギン⁴²⁾のCDを聴き、人口300人余りの島で、ビギンの1000人のコンサートが実現した話をして、島の伝統と現代について話し合わせる。
- iv 可能なら、発展として、DVD教材から神への捧げものとして踊られるバリ島のバリ舞踊を鑑賞させ、種子取祭の芸能との違いや共通点などについて、どのように感じたか話し合わせる。

第四段階：文化背景の学習2 沖縄の歴史と現状

- i 人頭税や方言札、第二次世界大戦時の沖縄戦、アメリカ占領や米軍基地の話をして、沖縄の歴史と現在について話し合わせる。
 - ii 方言札の意味と文化を失うことについて、自分の地域の言葉や地域の文化について話し合わせる。
 - iii 可能なら、アイヌ民族やアメリカの先住民の同じような歴史や文化を失った歴史についても学ばせる。
- (3) まとめ：民謡から竹富島の明るいたくましさを感じとって歌う
DVD教材から上勢頭同子の「くばぬ葉ユンタ」を鑑賞させ、竹

42) 沖縄県石垣島出身のグループ。沖縄にこだわった歌作りを行い、2000年竹富島でライブを行った。

富島の人々の明るさ、たくましさを感じとらせ、口三味線（^{くちじやみせん}テンツテン テンツ テンツ テンツ テンツ テン）と一緒に歌う。

4-2-4 バリ島の音楽文化による授業設計

1) 他教科との連携

音楽科に加えて、以下のトピックを扱うことで、他教科と連携した授業を行ったり、総合的な学習の時間の中で活用したり、ワークショップを行うことができます。

- (1) 国語科 インドの叙事詩ラーマヤナ⁴³⁾の物語、インドネシア語
- (2) 社会科 熱帯性気候や珊瑚礁の海に囲まれた風土、火山、祭り仲間組織、米の多毛作、儀式
- (3) 家庭科 市場、料理、お供えづくり、台所、服装
- (4) 図画工作科 バリ舞踊の衣装、ワヤン人形の造形、仮面
- (5) 体育科 バリ舞踊の踊り方の基礎
- (6) 道徳 二元論における善悪の考え方、魔女ランダ
- (7) 環境教育 珊瑚礁の保護
- (8) 総合的な学習としてそれらの複合学習

2) 教材性と授業のねらい

ケチャやガムランは、自立した心をもって友達とコミュニケーションする力、自分が声や音を出しながら他の声や音を聴く力をもつことが前提となります。これらの力は、どの音楽文化でも必要ですが、ことにケチャやガムランの場合は、音楽の成立自体に不可欠な前提であるため、常日頃の音楽活動の中でこれらの力を育成する必要があります。これらの力は、学習の前提であると同時に学習目的でもあるのです。

授業のねらいとしては、バリ島の音楽文化がもつ、以下の5点の異文化性を体験することがあげられます。

43) ヒンドゥー文化圏に伝来する古代インドの二大叙事詩のひとつで、紀元前2世紀頃に成立したといわれる。バリ島へはヒンドゥー文化と共に伝来し定着した。古代英雄コーサラ国の王子ラーマが略奪された妃シーターを奪回するというあらすじ。

- (1) 音楽に現われた二元論の考え方（コテカンの奏法）。
- (2) 西洋の拍子とは異なる時の周期⁴⁴⁾。
- (3) 様々な仕掛けによる指揮者のいないアンサンブル。
- (4) 神への捧げものとしての芸能のありかた。
- (5) 芸能によるトランス状態⁴⁵⁾。

授業には、匂いをかいだり食べたり、触ったり、着たりすることができるように、以下のような現地の生産物などを用意し⁴⁶⁾、直接体験の場を設けると理解が促されます。



ケチャの授業風景
福島大学教育学部附属中学校

(1)文化を育んだ亜熱帯の気候、珊瑚礁の美しい海岸など、風土を理解するための優れた写真や映像、(2)ガムランの楽器や口琴、アンクルンなど諸楽器、(3)お香やバリ島の食べ物、(4)お供えとしての南の花々、(5)カインやクバヤ、ケチャの衣装など、(6)ケチャ全編の映像資料。

3) DVD教材を用いた授業モデル

以下のような学習過程による授業モデルを組み立てることができます。この授業モデルを応用して授業やワークショップを組み立てることもできます⁴⁷⁾。

バリ島の芸能を学ぶキーワードは、自立とコミュニケーション力、互いを聴く力です。本著では、ガムランは、教育の現場で入手することが

44) 西洋の拍子と異なる時間の枠組みでゴン類が担当する。西洋の拍子とは違って重心の移動を伴わず、1拍が同時に最終拍であるという独特の拍感をもつ。8拍周期や16拍周期が多いとされる。バリ島では、ゴング (gong) の発音 ng を表に出して発音せず、ゴンのように発音するので、現地の言葉に近い表記を用いた。

45) 芸能体験の中で、一種催眠状態のような、意識が通常とは異なった状態になること。バリの芸能では、演者が、このような飛んだ状態になっていくことが多い。

46) 簡易楽器や御香、バリ・コーヒー、お菓子などの食べ物、装飾品などは楽器店や輸入雑貨店などで入手が可能である。

47) 宮城県七ヶ宿町立七ヶ宿中学校の橋本牧が、宮城教育大学附属中学校で、ガムランを教材にして実践を行った（橋本 1999-2000）。〔授業提案のための資料・音源〕p.85)。

困難だと思しますので、ケチャを教材に扱います。ケチャは、口ガムランとも呼ばれ基本的な音楽構造にガムランと共通性が多いのです。

ケチャは、学習者にとっては、チャットという叫び声を出すこと自体に抵抗感が大きい場合がありますが、抵抗感を恐れて手拍子などで導入しないようにしま



ガムランの授業風景
宮城教育大学附属中学校

しょう。子どもたちは必ず受容しますので、常日頃から異文化に対する抵抗感を払拭する試みも必要です。教師の第二次継承者としての声の出し方や演じ方、トランス状態など教師自らが殻を破って取り組むことが求められます。

バリ島の音楽文化の異文化性の学習を目的とするケチャでは、パターンの合唱に終わらせないという視点が重要です。チャットという合唱は、ケチャの一要素であって、その上にラーマーヤナ物語を語りや舞踊によって神への捧げ物として演じられます。ケチャの全編を体験することは困難ですし、必要ではありませんが、ケチャを構成するチャットという合唱以外の様々な要素を体験できるように、DVD教材には、そのためのモデルを収録しました。動作をつけて、入場や祈りを含めた上演スタイルをとって演じて欲しいと思います。その際、衣装や花などを身につけることは、学習者にとって学習へのモチベーションとして大変有効です。

また、ケチャの学習では、ケチャを支える諸要素、自然、生活、生活習慣、宗教などと切り離すことなく、総合的に学ぶ必要があります。そして、西洋の拍子とは異なる時の周期という概念を絶えず感じる事が大切です。なお、この授業設計の全ての段階を踏まえる必要はありません。

(1) 導入：日本とは異なる熱帯の島、バリ島への導入

- i バリ島のお香をたき、ゆったりと気持ちと身体をリラックスさせる。寝転んだり、ヨガなどを試みたりするのもよい。
- ii 導入として、DVD教材からバリ島の自然や芸能の映像を見せる。

- iii 気候風土、芸能の違いについて、自由に感想を話し合わせる。
- iv 二人一組になり、背中を合わせて胡坐をかいて、教師の第二次継承者としての8拍周期の身体のゆれを模倣させながら、チャツツ チャツツ チャツツ チャツツとお腹から声を出させる。コミュニケーション体験1。
- v 映像からケチャを少し見せる。
- vi 特徴的なこと、気づいたこと、この芸能が何を目的にしているかを考えさせる。

(2) 展開：

第一段階：異文化性の学習1 神への捧げものとしての芸能・入れ子のリズムの創造学習

- i DVD教材の上演のモデルを見せて、最初の祈りの場面を模倣させる。
- ii 学習者の日常にある祈りについて話し合わせ、芸能における祈りの意味について考えさせる。
- iii ケチャの入れ子のリズム（コテカン⁴⁸⁾）を体験するために、二人一組になって、入れ子のリズムを作って合わせる創造的な音楽学習を行う。コミュニケーション体験2。
- iv コテカンのリズムがバリ人の二元論の考え方から来ていることを話し、DVD教材から魔女ランダとお葬式の映像を見せ、芸能や儀式に現われた人々の考え方について話し合わせる。

第二段階：異文化性の学習2 ケチャの伝承法に則ったパターンの学習

- i バリ島の伝承法を学ぶためにDVD教材から、子どものガムランと舞踊のレッスンの映像を見せる。
- ii 五線譜を用いない口から口、身体から身体へという伝承方法について話し合わせる。
- iii 映像から伝承者を見せてケチャのパターンの学習を行う。パターンの学習は、必ず時の周期を唱え、聴きながら行う。時の周期の

48) バリ島の音楽に特徴的な入れ子のリズム。インターロッキング奏法。

説明を行って、もともになっているガムラン楽器の時の周期を聴かせる。コミュニケーション体験3。

- iv 一度に全部のパターンを学習させるのではなく、学習者の能力に応じて負担にならないようにパターン練習し、よく聴き合い、コミュニケーションしながら時の周期を聴いて合わせていく。パターンの学習は、西洋式にまとまったグループに分けて、1つのグループに1つのパターンという形で練習をさせない。パターンは、1つ1つ個別に行わず、時の周期を聴きながら、加算式に合わせていく⁴⁹⁾。コミュニケーション体験4。
- v パターンの学習は、できればトランス状態の擬似を体験できるところまで、熟達させる。コミュニケーション体験5。
- vi 暮らしの中にある考え方が、ケチャのパターンの入れ子のリズムに反映されていることについて話し合わせる。

第三段階：異文化性の学習3 生活における祈りの意味とケチャの成立、芸能の現代化についての学習

- i DVD教材から、お供え作りなど生活の中の祈りの映像を見て、もう一度祈りについて考え、芸能を捧げるという意味を考えさせる。
- ii 可能なら、DVD教材から椎葉の神楽や竹富島の種子取祭の芸能を見て、日本の芸能も神に捧げる芸能であることを学ばせ、バリ島の芸能との類似点について気づかせる。
- iii 可能なら、DVD教材などによって竹富島の琉球音階による民謡を聴かせ、バリ島の音階と沖縄の音階との共通性に気づかせる。
- iv DVD教材からバリ舞踊を見て、バリ島の伝統的呪術の中に、舞踊が取り入れられてケチャが成立したことを学ばせる。ケチャ成立の助言者ウォルター・シュピース (Walter Spies)⁵⁰⁾の仕事や、バリ・ルネサンス、伝統の現代化についても学ばせる。ケチャ

49) ケチャのこの指導法は、グヌン・ジャティ歌舞団が1997年に宮城教育大学で行ったワークショップにおける指導法である。

50) ドイツ人の画家、音楽家で映像作家でもあった。1930年代に伝統的な呪術サンヒャンに、古代インドの叙事詩ラーマーヤナ物語と女性の舞踊を組み合わせてケチャを創ることを助言した。

以外の芸能、ガムランと舞踊を鑑賞させる。

(3) まとめ：ケチャの上演の体験

耳に紅白の花をつけ、入場、祈り、ケチャの合唱などDVD教材の上演見本のように、できれば衣装を着けて演ずる。ケチャの衣装である腰巻の白と黒の格子柄は、白は正義、黒は邪悪というバリ人の二元論の考え方を象徴していることを説明する。

4-2-5 五箇山の音楽文化による授業設計

1) 他教科との連携

音楽科に加えて、以下のトピックを扱うことで他教科との連携した授業を行ったり、総合的な学習の時間の中で活用したり、ワークショップを行うことができます。

- (1) 国語科 昔話
- (2) 社会科 歴史、五箇山の自然、合掌造りの家、民俗と暮らし
- (3) 家庭科 伝統的な食べ物、衣服
- (4) 図画工作科 合掌造りの建築様式、和紙づくり
- (5) 体育科 しで踊り、ささら踊り、手踊り
- (6) 道徳 環境との調和
- (7) 環境教育 自然と厳しい自然に調和して生きる暮らしの知恵
- (8) 総合的な学習としてそれらの複合学習

2) 教材性と授業のねらい

五箇山民謡「こきりこ」⁵¹⁾は、1つの教材で、日本民謡の歌い方、日本の踊りの踊り方、日本の庶民の楽器であるこきりこ⁵²⁾、太鼓、篠笛などの演奏法を容易く学習できます。授業のねらいは、日本の伝統音楽の学習の基礎となる「こきりこ」の歌、踊り、楽器演奏の3種を総合的に体験することにあります。また、五箇山は、かつて雪の時期には集落ごとの行き来さえままならず、唯一の娯楽が民謡でした。雪国の生活の知

51) 富山県五箇山民謡「こきりこ」は、前掲書 p.6注10に収められている。

52) 打楽器。7寸5分(約23cm)に切った2本の竹を打ち鳴らす楽器で、合掌造りの屋根に使われた竹が囲炉裏の煙で燻された燻竹から作られている。

恵の結晶である合掌造りの家など背景の学びも豊富です。

五箇山では特製の篠笛が用いられていますが、塩ビ管によって容易く手作りし、使用させることが可能です⁵³⁾。日本の民俗芸能は、各地で伝承が困難になっていますが、伝承が困難なものが篠笛だと言われています。「こきりこ」の学習の中で篠笛を学習することは、その後、学習者が各地の民俗芸能の伝承に貢献する可能性を保障することにもつながりましょう。

授業には、匂いをかいだり食べたり、触ったり着たりすることができるように、以下のような現地の生産物などを用意し、直接体験の場を設けると理解が促されます。

(1)五箇山の自然・文化を伝える大きな写真、民話の本、民話のCDやビデオなど、(2)楽器類（こきりこ、篠笛、太鼓、ささら、棒ざさら）、(3)「こきりこ」の装束、(4)五箇山の和紙、民具・民芸品、(5)五箇山豆腐、漬物などの食べ物⁵⁴⁾。



塩ビ管の篠笛を吹く子どもたち
福島県伊達郡川俣町立福沢小学校

3) DVD教材⁵⁵⁾を用いた授業モデル

以下の学習過程による授業モデルを組み立てることができます⁵⁶⁾。

53) DVD教材の補作として、塩化ビニル樹脂を主原料とした『塩ビ管による篠笛づくり』のビデオを制作した。塩ビ管による篠笛は、安価で容易く製作でき、日本の楽器の学習に有効である（降矢他 2008）。

54) 越中五箇山筑子唄保存会五箇山商工会（<http://www.shokoren-toyama.or.jp/~gokayama/top.htm>）などを通じて入手が可能である。

55) 前掲書 p.6注10に収められている。「こきりこ」については、日本語版のDVDを制作していないので、英語版を使用されたい。英語版は、ネットで購入できる。英語版の使用に困難がある場合は、『DVDでまなぶ・おぼえる 富山県五箇山こきりこ』（2005 越中五箇山筑子唄保存会）を使用することもできる。英語版は、*Kokiriko: Traditional Dance and Song from Gokayama, Japan* と題し、View Song, Learn Song, Learn Dance, About Songの項目で、伝承者から「こきりこ」を学べるように構成されている。About Songの項目には、「こきりこ」の背景として、山崎シイの歌や、「こきりこ祭り」、「子どもこきりこ」も収められている。

56) 宮城県七ヶ宿町立七ヶ宿中学校の橋本牧が、宮城教育大学附属中学校で、五箇山民

- (1) 導入：文化学習1 五箇山の暮らし、合掌造りの家、「こきりこ」の学習
- i 教師の語りと「こきりこ」の歌唱で、学習者を「こきりこ」の里へ誘う。
 - ii 合掌造りの家並みなどの写真などを見せる。
 - iii 写真を見た印象から、「こきりこ」の里の暮らし、合掌造りの家について、自由に想像させ話し合いをさせる。
 - iv 現地の生産物が入手できれば食べてみるなど、直接的な体験をさせる。
 - v 楽器のこきりこを見せ、こきりこを叩かせる。こきりこが合掌造りの天井で燻^{すすだけ}された煤竹であることを説明し、合掌造りの家の暮らしについてもう一度話し合いをさせる。
- (2) 展開：

第一段階：民謡の歌い方と日本の楽器の演奏法の学習

- i 教師の歌に合わせて、こきりこを叩きながら「こきりこ」を歌わせる。
- ii 踊りや楽器伴奏のついた「こきりこ」の演奏を鑑賞する。感想の話し合いをさせる。
- iii 岩崎喜平⁵⁷⁾の「こきりこ」の歌い方について話し合わせ、民謡の歌い方について考え合わせる。これまで歌ってきた頭声的な声の出し方との違いについて考えさせる。
- iv 自然な日本語による民謡の歌い方を習得させる。気持ちよいことを感じさせる。
- v 伝承者の演奏を見せて、太鼓、ささら、こきりこ、棒ざさらの演奏の仕方を学ばせる（できれば篠笛も。篠笛については、教師の個別の授業が必要である）。
- vi 歌と伴奏を合わせて演奏体験をさせる。

謡「こきりこ」を教材にして、塩ビ管で篠笛を作り、歌、踊り、日本の楽器による実践を行った（橋本 2000-2001）。（「授業提案のための資料・音源」 p. 85）。

57) 越中五箇山筑子唄保存会「こきりこ」の歌い手。無理の無い自然な発声による歌い方で知られる。

あとがき

本著は、拙稿『多文化音楽教育の指導法の研究—デジタル教材の開発とその実践的検証—』¹⁾をもとに、第三部を割愛し、あらたに授業提案を増補して文体などを書き改めました。拙稿の指導教官であった山本文茂氏に感謝申し上げます。

本著は、多くの方々に支えられて完成を見ました。ここにお名前を挙げて、お礼申し上げます（敬称略）。

多文化音楽教育の理念や指導法とDVD教材の有効性は、2004年度から3年間、多文化音楽教育研究会に参加した小学校から大学までの先生方との共同研究を通してその有効性が検証されました。授業設計や授業提案は、福島コダーイ合唱団や多文化音楽教育研究会との共同研究がベースになっています。多文化合唱の演奏に取り組んでくださった福島コダーイ合唱団と多文化音楽教育研究会²⁾の皆さまにお礼申し上げます。

DVD教材は、以下にあげた皆さまの取材協力を得ました。

阿寒湖アイヌコタン：弟子シギ子、西田香代子、椎葉村：椎葉一、浪子、中瀬守、ケサヨ、竹富島：上勢頭同子、上勢頭次子、バリ島；グヌン・ジャティ歌舞団、プリンティング・マス歌舞団、イ・マデ・スイディア、イ・マデ・ジェラダ、イ・ワヤン・スウェチャ、守屋圭子。

本著に至る道のりには、先輩諸氏からの学びがあります。

井上頼豊、ウグリン・ガーボル、大橋力、岡本文弥、清瀬保二、クルターグ・ジェルジュ、小泉文夫、セーニ・エルジェーベト、徳丸吉彦、中村とうよう、成田絵智子、林光、平井澄子、フォライ・カタリン、ホルヴァート・アニコー、メアリー・ゲッツ、モハーイネー・カタニチ・マリア。

本著の完成に関わって、DVD教材の改訂・レーベル作成：阿部千春、サイト・マップ作成：渡辺真純、校正は、上記2氏に加えて岩淵摂子、

1) 博士論文 東京藝術大学 論博（学術）音第7号（2005.10）。

2) 2005年度 小学校（安齋のみ子、藤田加代、松原美保、目黒稚子、山崎純子、吉田操）、中学校（大木恵美、橋本牧）、高等学校（竜田晴美、目黒恵子）、大学（奥忍、澁谷由美、降矢美彌子）。2006年度 小学校（安齋のみ子、手代木明子、藤田加代、目黒稚子、山崎純子）、中学校（大木恵美、橋本牧、水池純子）、高等学校（竜田晴美、目黒恵子）、養護学校（山田千夏）、大学（奥忍、降矢美彌子）。2007年度 小学校（藤田加代、松原美保、目黒稚子、山崎純子）、中学校（大木恵美、橋本牧）、高等学校（竜田晴美、目黒恵子）、特別支援学校（山田千夏）、大学（奥忍、降矢美彌子）。

橘浩昭、表紙助言：奥忍。

先生方や子どもや学生たち、仲間に支えられて、力いっぱい演奏と研究と音楽教育に取り組んで来られたことに、深い感謝と感慨があります。

本著は、独立行政法人日本学術振興会平成 20 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費 学術図書 課題番号 205181）の助成を得て刊行します。出版にあたって、現代図書の野下弘子さん、三谷千雅さんにお世話になりました。お礼申し上げます。

2009 年 10 月

降矢美彌子

索引

【あ行】

IT 情報化時代	16
アイデンティティ	iii, 12, 21, 22
アイヌ民族	31, 32, 33
ア・カペラ合唱	62, 63
「安里屋ユンタ」	38
『遊びーピアノのために』	72, 74
アルス・ノーヴァ合唱団	62 注
アンクルン	43
異文化性	30, 84
異文化理解	17
異文化音楽	17, 84
イヨマンテ	33
岩崎喜平	49
インターナショナル・ヴォーカル・アンサンブル (IVE)	5
ウェイド, ボニー C.	5
ウエスリアン・シンポジウム	2
上勢頭同子	40
ヴェンダ族	2
ヴォルク, テレス M.	3
ウディボウ	41
牛ぬばん ソレソレ	39
ウポポ	31
ウニャゴ	53 注
江渕一公	1
エリオット, デイヴィッド J.	3
岡本文弥	68, 69, 70
小沢昭一	70
音階 (日本の伝統音楽)	54

【か行】

学習指導要領	10, 11
神楽	35, 36, 37
合掌造り	47, 48
カムイノミ	27
ガムラン	28, 42
カノン	33, 62, 64

カルミナ・スロヴェニカ	62 注
「願成就 (大神) 神楽」	37
神司	38, 41
吉川和夫	60
キャンベル, パトリシア S.	3, 4, 5
「切支丹道成寺」	71
「くばぬ葉ユンタ」	41
グラント, カール A.	1
クルアーン	58, 59
クルターグ, ジェルジュ	72, 73
グレゴリオ聖歌	58, 59
グローバル化	i, 77, 84
グローバル・ミュージック・シリーズ	4
ケージ, ジョン	75
ゲスト・ティーチャー	54
ケチャ	28, 42, 44, 46
ゲッツ, メアリー	5, 6
現代音楽	72
小泉文夫	52
口琴	34
口頭伝承	20, 83
口頭文芸	33
公民権運動	i, 1
五箇山	47
こきりこ	47, 50
国際音楽教育協会	6 注
国際理解教育	11
ゴスペル・ソング	65, 66
コダーイ, ゴルターン	61
コテカン	45
「言葉とはなに？」	73, 74
小林哲也	1

【さ行】

在日朝鮮人	9
「佐倉義民伝 甚兵衛渡し場の段」	71
三線	40
椎葉	35

J-POP.....	65	【な行】	
ジェンダー.....	9	二元論.....	27, 28, 45, 47
視聴覚教材.....	15, 16	「日本の放浪芸」.....	70
「ジッチュ」.....	41	ニューカマー.....	9
篠笛.....	48	ニューファウンドランド・シンフォニー・	
柴田南雄.....	60	ユース・クワイア.....	62 注
自文化.....	iii, 56	ネトル, ブルーノ.....	2, 3
チャーマニズム.....	59	「ノヴェンバー・ステップス」.....	74, 75
シュピース, ウォルター.....	46	【は行】	
シュミット=レンガー, バーバラ.....	2	ハモネブ.....	65, 66
唱歌.....	54	バリ島.....	28, 42, 43
声明.....	58, 59, 60	バリ・ヒンドゥー教.....	28
人頭税.....	38	バルトーク, ベーラ.....	61 注
新内節.....	68	バンクス, ジェームズ A,.....	1
図形楽譜.....	72	平井澄子.....	68, 69
煤竹.....	49	ファーン, ジェイ.....	6
「スーブドゥイ」.....	41	フィールド・ワーク.....	19, 53-55
セリ歌.....	35, 37	福島コダライ合唱団.....	6 注
セルフ・エスティーム.....	iii	ブラッキング, ジョン.....	2
全米音楽教育者会議 (MENC).....	2	文化理解.....	i, 1, 4, 11, 77
全米音楽教育者協会.....	2	ベケット, サミュエル.....	73
【た行】		方言札.....	38
第二次継承者.....	18, 85	母文化.....	16, 17, 85
第二次口頭性.....	iii, 83	【ま行】	
竹富島.....	38, 39, 40	マイノリティ.....	9, 12, 26, 32, 83
嶽之枝尾神楽.....	36, 37	マジヨリティ.....	84
武満徹.....	73	マルチ・エスニック音楽教育.....	4
種子取祭.....	40, 41	「ミルク」.....	41
タビオラ合唱団.....	62	民俗音楽.....	25
多文化音楽教育.....	i, ii, 3, 4, 10,	民族音楽学.....	2
11, 12, 15, 18, 22, 77		民俗芸能.....	53
多文化教育.....	i, 1, 83	民謡.....	47, 49
地球音楽.....	i, 84	ムックリ.....	31, 33, 34
チョクウェ族.....	2	モニョーク, イルディコー.....	73, 74
TT.....	20	【や行】	
DVD 教材.....	iii, 6, 25, 26,	八重山ミンサー織り.....	38
27, 29, 30, 32, 36, 39, 43, 77, 78		焼畑農業.....	35
時の周期.....	43	ユーカラ.....	33
徳丸吉彦.....	13 注, 20		
トランス状態.....	43		

ユネスコ 11
 「4分33秒」 75

【ら行】

ラマ教 58 注
 ラーマーナ 42, 44
 「蘭蝶」 70
 リムセ 27
 琉球音階 39, 54 注
 『連篇歌曲 愛の世界』 70, 71
 ロシア正教 58 注

【わ行】

わらべうた 52, 53
 ワールド・ミュージック教育 4

著者紹介

■ 降矢 美彌子 (ふりや みやこ)

東京都に生まれる。

1965年 武蔵野音楽大学音楽学部器楽科(ピアノ専攻)卒業。

1987年 国際コダーイ協会の奨学生としてハンガリーに留学、以後毎年ハンガリーで研鑽を重ねる。

宮城教育大学名誉教授 博士(学術)。

専門 多文化音楽教育、ハンガリーのピアノ教育・音楽教育、合唱指揮、クルターグ・ジェルジュのピアノ作品研究。

〈主な論文、訳書、CD制作〉

論文 『多文化音楽教育の指導法の研究—デジタル教材の開発とその実践的検証—』東京藝術大学博士論文(2005年)。

訳書 『テーク新ピアノの学校1 ピアノとの出逢い&音楽の知恵袋』・『テーク新ピアノの学校2 ピアノは友だち&連弾のよろこび』・『テーク新ピアノの学校 別巻 ピアノとの出逢い 指導の手引き』全音楽譜出版社(1998年)、『バルトーク・ペーラ 児童と女声のための合唱曲集 新訂版』全音楽譜出版社(2007年)。

CD制作 クルターグ・ジョルジュ『遊び—ピアノのために』ECD-92002/4 ばるん舎(1993年)、『ルタの木は高い』(『合唱名曲コレクション51』)東芝EMI TOCF-56002(1998年)、『Many Nations-Many Voices—合唱で結ぶ西洋と日本—』FKC-2000(2000年)、『バルトーク作曲 児童と女声のための合唱曲集』FKC-2001(2001年)、『多文化音楽学習のためのCD-ROM・DVD』(2004 平成12年度～15年度科学研究費補助金基盤研究)。

地球音楽の喜びをあなたへ

—未来の地球市民となる子どもたちのための多文化音楽教育—

2009年2月28日 第1刷発行

著者 降矢 美彌子

発行者 池上 淳

発行所 〒229-0013 神奈川県相模原市東大沼2-21-4

株式会社 **現代図書**

TEL 042-765-6462 (代)

FAX 042-701-8612

振替口座 00200-4-5262

ISBN 978-4-86299-008-2

URL <http://www.gendaitosho.co.jp>

E-mail info@gendaitosho.co.jp

(株)日本著作出版権管理システム委託出版物

- ・本書(含DVD)の無断複写は、著作権法上での例外を除き禁じられています。
- ・複写される場合はそのつど事前に(株)日本著作出版権管理システム(電話:03-3817-5670 FAX:03-3815-8199)の許諾を得てください。

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

©Miyako Furiya, 2009

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

ISBN978-4-86299-008-2

C3073 ¥2381E

定価 (本体 2,381 円 + 税)



9784862990082



1923073023815